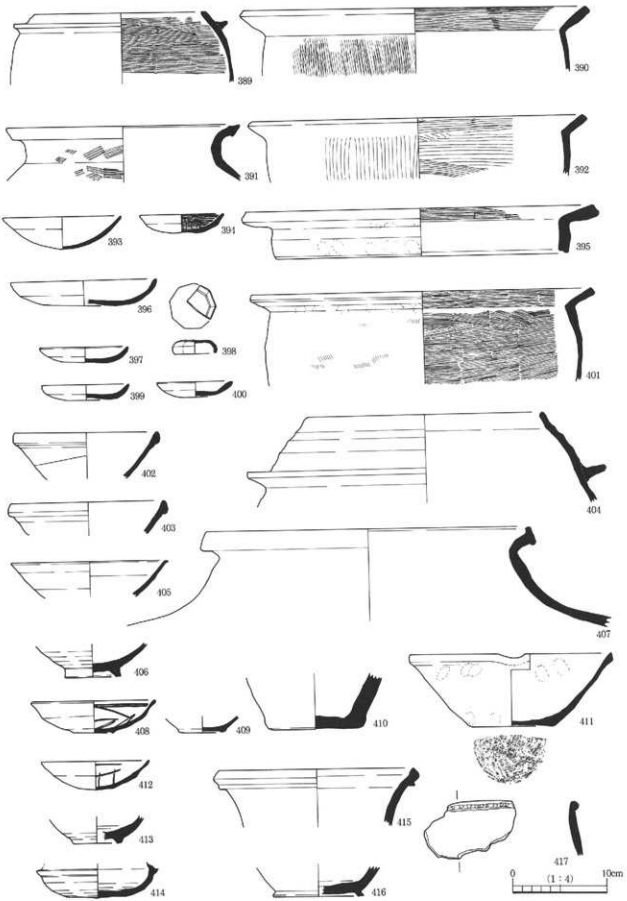


第102図　３Ａ区包含層土器（２）

であるが、円筒形の体部から強く屈曲して外に開く口縁部をもつ。口縁部内面にのみハケメが入り、以外はきれいにナデで仕上げられている。外面には指頭圧痕が残る。用途不明。

393・394・396～401・402・403・405・406は第4遺構面ベース層の遺物である。393の瓦器椀は表面磨滅してミガキが判別できなかったが、器形からⅣ型式と判断する。それに比して394の瓦器皿は楠葉Ⅱ型式の古いものである。土師皿は口径15㎝以上の大皿（396）と小型（397・399・400）がある。白磁碗は玉縁状口縁（402・403）と薄く外に開くもの（405）の両方がある。398は白磁の合子蓋で、平面八角形と推定できる。401は土師質鍋、外面はタタキ調整。407は陶器甕。常滑であろう。

408～412は第5遺構面ベース層の遺物である。瓦器椀（408・412）はⅢ型式とⅣ型式で時期幅がある。410は須恵質の壺底部。411は東播系須恵質こね鉢である。

413は第6遺構面ベース層出土の陶器の碗、やや軟質の淡赤色の素地に灰釉系の釉薬がかかる。信楽か。414～416は第7遺構面ベース層出土の須恵器杯身、壺口縁および底部である。417は第9遺構面の上層の砂層から出土した縄文時代晩期長原式の深鉢片である。

418～426は第2遺構面遺構出土の土器である。瓦器椀（418・419・421）は419が楠葉型Ⅲ－2型式。以外は和泉Ⅲ－3型式。420は青磁碗で、土師皿は丸味を帯びたもの（425・426）と胎土が精良で薄いもの（422・423）がある。

第3遺構面土坑133では瓦器椀や土師皿が一括廃棄されていた（427～443・459～461）。瓦器椀は431が楠葉型で以外は和泉型。高台が断面三角形のものや台形のものとバラエティーがあるが、いずれもⅢ－3～Ⅳ－1型式におさまる。土師皿は大・小あり、各々2タイプに分類できる。土師皿は13世紀後半代のものである。その他瓦質三足（459）や外面にタタキを施した須恵質の甕（460）、土師質鍋（461）がある。

落込85からは高台が外に張り出す白磁碗Ⅲ類の碗（444）や瓦器椀（450・454）、土師皿が出土した。瓦器椀は全く高台をもたないⅣ型式のもので、落込85は他の遺構に比べて時期的に新しいと言える。

445は体部外面に蓮弁文をもつ龍泉窯青磁小碗で、土坑71より出土した。

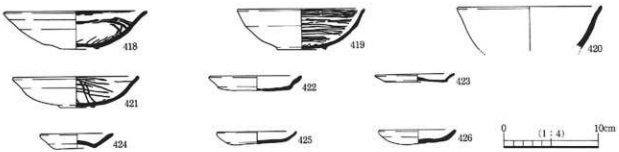
446～449は長方形の土坑60に4枚重ねて上向きに置かれていた土師皿で、4枚とも丸味を帯びた、最も普遍的に出土するタイプの土師皿で、ほぼ同法量である。

457は井戸58の土師皿で土坑133の土師皿などと同時期を示すのに対し、同遺構出土の甕（458）は、褐色の胎土に石英や長石粒を含み、外面暗オリーブ色釉で施釉された常滑焼の甕で、常滑焼でも最古の型式、11世紀後半代のものと思われる。図示し得なかったが他にも11世紀代と思われる遺物もあり、井戸58の出土遺物には時期幅があると言えよう。

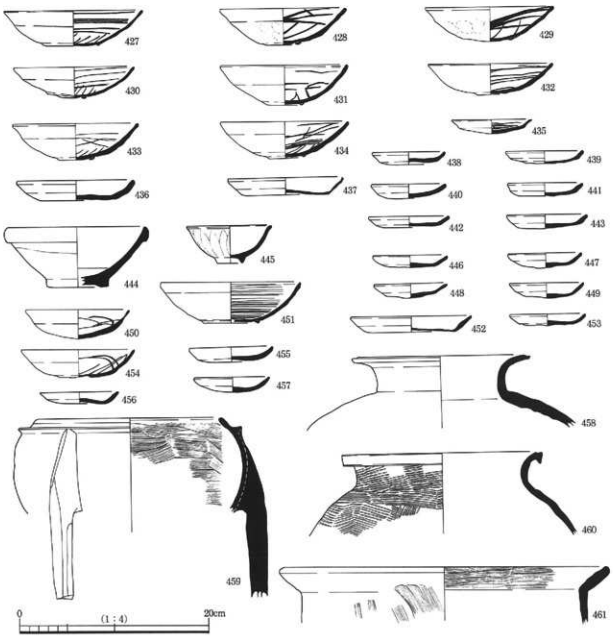
土器溜54は1A区と3A区にまたがって検出したが、一括して3A区の遺物として報告する。ここでは約140点の遺物を図示したが瓦器椀や土師皿に関してはこの数倍の出土をみた。

462～489が瓦器である。462は口径17.6㎝、器高6.4㎝の大型の椀というよりも鉢である。平らに整えられた口縁端部と、高さは低いが断面三角形の高台をもつ。外面のミガキはほとんど認められない。最も特徴的なのが内面のミガキで、見込みから体部にかけて放射線状に、らせん状ミガキを17～18本施す。見込みにも中心よりややずれた場所にらせん状ミガキが入る。大型の瓦器鉢の出土例は南河内などでみられるが、このようなミガキをもつ鉢の類例は皆無である。胎土やつくりは他の瓦器椀と似ているので、在地産と思われる。

463は片口鉢で内外面ともやや疎になるがミガキを施される。同器種の別個体片も存在する。

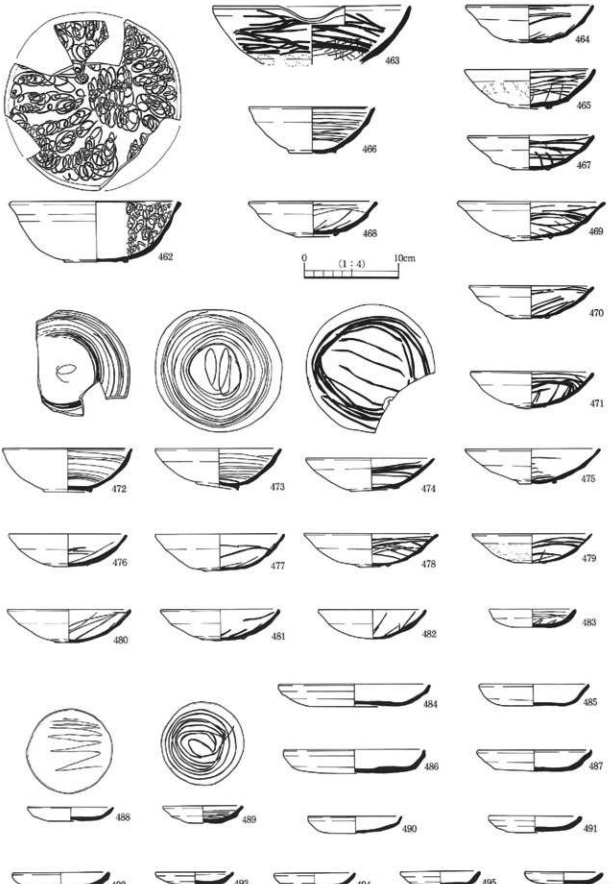


第103図　3 A区土坑 3・土坑 4・土坑 5 土器

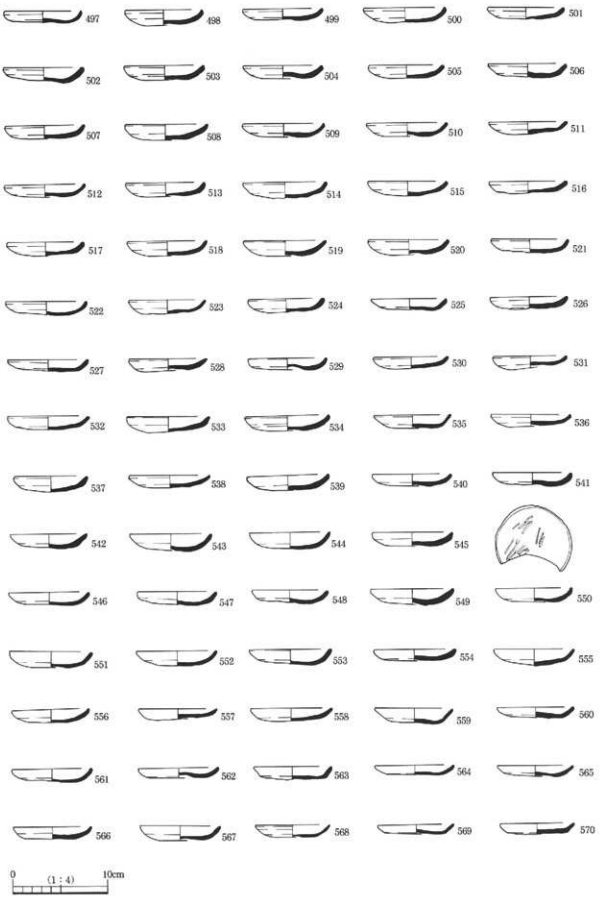


第104図　3 A区土坑133・土坑60他遺構土器

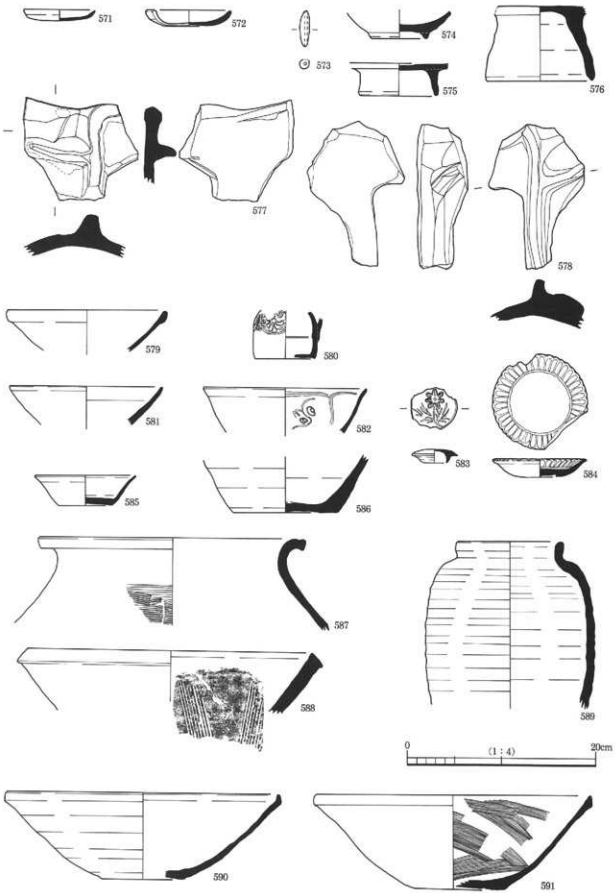
464～482は瓦器椀で466・472は楠葉型、以外は和泉型である。ただし、破片数で数えると楠葉型の割合はこれより増加する。いずれも外面のミガキは認められず、内面は体部は疎らにミガキを数条巡らし、見込みには平行線ミガキやらせん状ミガキが入る。高台が断面台形や三角形で残るもの（465・466・



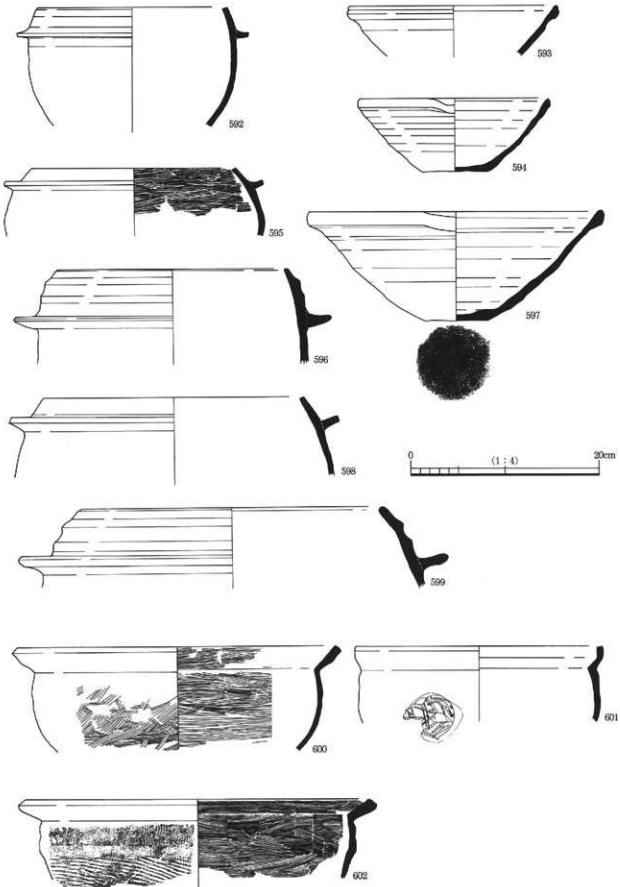
第105図　３Ａ区土器溜54土器（１）



第106図　３Ａ区土器溜54土器（２）



第107図　３Ａ区土器溜54土器（３）



第108図　３Ａ区土器溜54土器（４）

468・470など）とまったく高台をもたないもの（480・482）と、Ⅲ－２型式からⅣ－１型式まで型式差がある。

483・488・489は瓦器皿で483・488は楠葉型。瓦器椀と同時期のものである。

484～572は土師皿で大きさから大・中・小の３つに分類できる。大（484・486）は口径15㎝前後の余り見られない大きさのもので、出土点数も少ない。中（485・487）が通常大皿と小皿に分けた時の大皿で、口縁部１段ナデのものと２段ナデのものがある。小皿も器形から口縁部１段ナデのものと２段ナデのもの、器壁を薄く直立気味に仕上げたものの３タイプがみられる。底部を盛り上げるヘソ皿に近いものは存在しない。550は内面をナデ以外に強くみがいたものか、ミガキの痕跡が残る。また、572は円周の約３分の１が、意図的に打ち欠かれていた。器壁が薄いタイプのものは、胎土が精良で成形も丁寧といえるが、他地域からの搬入ではなく在地産のものと考えられる。

573は土錘で径３㎜の穴を穿つ。

574は土師器椀の底部、575・576は土師質の台付皿の台部と思われる。

577・578は移動式のかまどで、同一のかまどの庇の左と右部分と思われるが、接合できなかった。

579～585は輸入陶磁類である。579・581は白磁碗、585は口縁部口禿の白磁皿Ⅸ類である。582は内面を沈線で何分割かしてその中に飛雲文を描いた、龍泉窯青磁碗Ⅰ類である。580・583・584は青白磁で580は小型の水注の胴部から底部である。把手がわずかに残る。胴部には直径2.8㎝の円内に浮彫花文を１つの単位としてこの円文が連続するようである。底部を残して施釉される。583は合子あるいは小壺の蓋で、口径4.8㎝の蓋の外周に対して内周は2.8㎝とすぼまり、身にはめ込むようになっている。浮彫の印花草花文で、和歌山県田辺市秋津経塚出土の白磁小壺蓋・合子などに類似する。[4] 584は青白磁の皿で口縁部が菊花をなす。底部を抉って凹ませており、この露胎部分は赤褐色に発色する。福岡県才多遺跡50号土壙より類形の皿がまとまって出土している。

586は陶器甕底部で断面灰白色の硬質の胎土をなし、内外面は淡赤色を呈する。外面には一部淡緑色の自然釉がかかり、焼はぜを生じる。胎土や素地の色調からは丹波産と思われるが、断定できない。

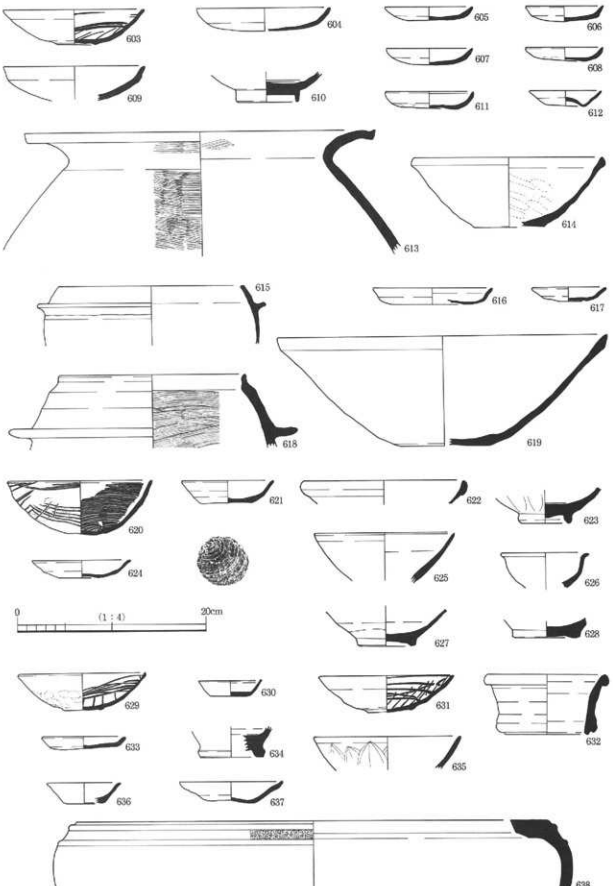
587は瓦質の甕で外面をタタキ、内面はロクロのあとをナデ消す。

588は備前擂鉢だが、口縁部形態から14世紀中頃のものと推定される。これ１点のみ新しくなるので、混入の可能性がある。

589は須恵質の壺で口径に比して器高が大きい、長胴形をなす。内外面ともに回転ロクロの段が強く残る。口縁部は直立して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。他に口縁部が短く、器高も短くなるが、同じ胎土、成形の壺口縁部も出土する。この壺は１Ａ区の包含層遺物と接合したため、１Ａ区第４遺構面ベース層遺物として紹介した。（第85図20）産地は不明だが、備前の古い型式のものに比較的近いと思われる。

590・591・593・594・597は東播系須恵質のこね鉢である。こね鉢の内面は通常指ナデ調整が多いと思われるが、591は内面に布状のナデ痕跡が残る。590は使用著しく、内面は剥離している。593のように口縁部を一度強くヨコナデし外反するものもあるが、多くはくの字状口縁から、端部が肥厚気味になる段階のもので、594のような小型化したものも現れるので土器溜54のこね鉢は13世紀後半から14世紀初めの時期を示す。

592・595は瓦質羽釜で、595は三足の可能性がある。596・598・599は土師質の羽釜で、596は瓦質羽釜を模倣した形態である。



第109図　3 A区第 4 遺構面遺構土器

600～602は土師質鍋で600は内外面ともにハケメ調整、602は外面タタキの上から一部ハケメを施し、内面は細かい横方向のハケメを施す。601は体部外面に脚を付けたような、円状の押圧痕が残る。

603～614は第４遺構面落込532の遺物である。Ⅲ－３型式瓦器椀（603）、土師皿（604～608・611・612、須恵質甕（613）などがある。609は土師質の杯である。612の土師皿は13世紀後半以降のものである。

616・617は井戸200の土師皿、615はPit729出土の瓦質羽釜、618は溝201の土師質羽釜、619は落込830の東播系こね鉢で内面の器面は剝離している。

620～628・638は溝203より出土した。620は高台ははがれているが、貼り付けの痕跡は残っており、器形やミガキの密度からも楠葉Ⅰ－２型式に相当する瓦器椀である。621は須恵器の皿で底部糸切り底、東播系のものである。622・625・627は白磁碗、623は青磁碗で体部外面は鎬蓮弁文、底部が厚みをもつ。内外面に施釉されるが、高台より内部は釉薬を掻き取って露胎となり、赤褐色に発色する。龍泉窯青磁碗Ⅳ類に分類される新しい型式のものである。626は陶器碗であるが、産地は不明である。638は瓦質火舎で体部が内弯する浅鉢型である。外面に凸帯を２条もち、その中に花菱文をスタンプする。胎土も精良で奈良火鉢と呼ばれる類のものであろう。この他、図化し得なかったが、他にも火舎の口縁部や獣足部が出土する。いずれも15世紀代のものである。

溝203の遺物は620や621の11世紀代の遺物を含む一方、638の15世紀代のものも混在し、時期幅がある。大きな溝であるため存続時期が長かったとも言えるが、主眼となる時期は14世紀以降で、15世紀に入って廃絶したと考えられる。

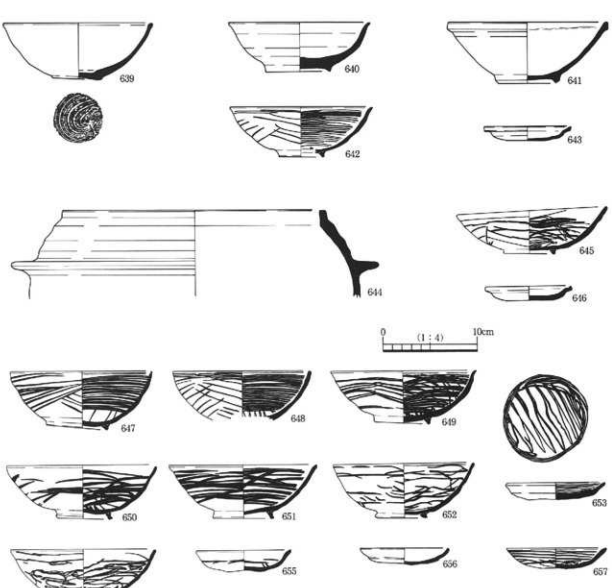
629・630・633・634は溝204の、631・632・635は溝205の遺物である。どちらも瓦器椀はⅢ－３型式で、他の土器からも溝204と溝205は同時期の遺構であろう。630は白磁皿、634は白磁壺底部、632は青磁壺の口縁部から頸部、635は青磁蓮弁文碗。

639～643は第５遺構面井戸1226より出土した。639は東播系須恵器椀で、内面見込みが凹む神出第Ⅰ期第１段階、11世紀後半のものである。完形。640は東海系灰釉碗、山茶碗である。高台は三角形で外反する口縁部をもち、体部内外面に灰釉がハケ塗りされる。ほぼ完形。641は白磁碗Ⅲもしくは Ⅳ類で、玉縁状口縁をもち、高台は断面台形で、外に張り出す。642は楠葉型Ⅰ－３型式の瓦器椀で、断面台形の高台をもち内面は体部にミガキが密に描かれ、外面にはミガキの分割が残る。643は土師皿でいわゆるての字状口縁の終末に近い形態である。

井戸1226出土資料は在地産の瓦器・土師器に加えて、他地域から搬入された土器や、輸入陶磁が一括して出土し、当遺跡の多様性を示す上で、またどの資料も11世紀後半から12世紀初めの限定された時期を示す点で、貴重な資料といえる。

647～657は土坑1500の一括資料である。土坑1500出土土器は瓦器椀、瓦器皿、土師皿に限定される。647・648が楠葉型、以外は和泉型。高台が台形・三角形のものや、口縁部が強く外反するもの、丸味を帯びるものなどバラエティーに富むが、外面ミガキに３～４分割の分割性がみられ、いずれもⅠ－３型式におさまるものだろう。見込みのミガキは平行線もしくはジグザグミガキ。瓦器皿（653・655・657）も瓦器椀と同時期のものである。この時期では楠葉型と和泉型はおよそ３：７の割合で出土し、13世紀以降に比べ楠葉型の比率が高い。

658～660の瓦器椀や、646・662の土師皿も井戸1226・土坑1500と同時期のものである。また、661も底部のみであるが須恵器椀で639とほぼ同時期のものである。須恵器椀は破片ではあるが他にも若干出

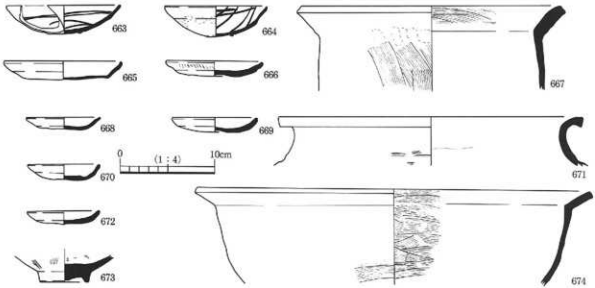


第110図　3 A区第 5 遺構面遺構土器

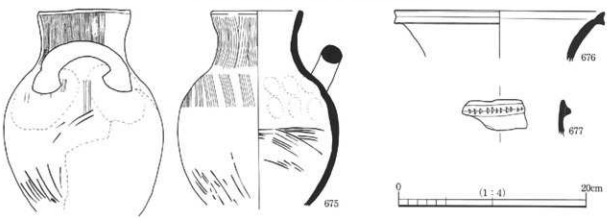
土しており、639は特殊例でなくある程度供給されていたと考えられる。

663～674も第 5 ・第 6 遺構面から出土した資料であるが、若干新しい様相をもつ。667はPit1262の土師質甕で、674の土師質鍋に比べると古い型式のものである。外面タテのハケメ、内面は口縁部ヨコハケメ。666はPit1508の土師皿であるが、体部外面にヘラ状のキザミ痕が残る。663の溝1222の瓦器椀は口縁部から体部が意図的に打ち欠かれていた。663・664・668の溝1222出土遺物からみる限り、この溝は14世紀代の遺構であり、第 5 ・第 6 遺構面より上層の遺構と言えるだろう。

675は第 9 遺構面溝1928の弥生土器水注である。外面は口縁部から頸部にかけて縦方向のハケメ、体



第111図　３Ａ区第５・第６遺構面遺構土器



第112図　３Ａ区第８・第９・第10遺構面遺構土器

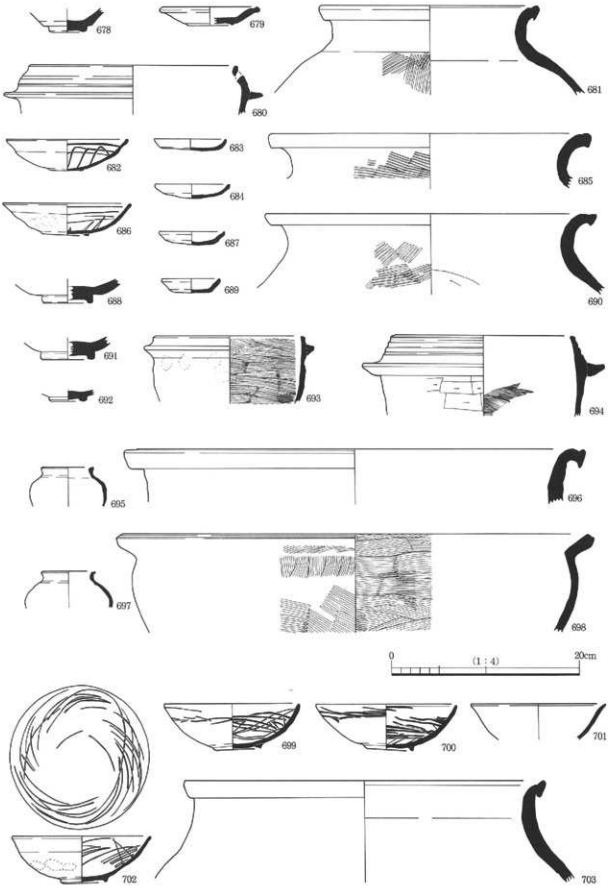
部はケズリを施し、内面も体部はケズリ、口縁部から頸部はヨコナデ。把手を付ける際の内面からのユビオサエのあとが強く残る。把手や体部の一部に焼成の際の黒斑をもつ。弥生時代中期後半。676は第10遺構面Pit1961の須恵質壺口縁。677は第10遺構面溝1949の縄文晩期船橋式の深鉢片である。

４）４Ａ区の土器

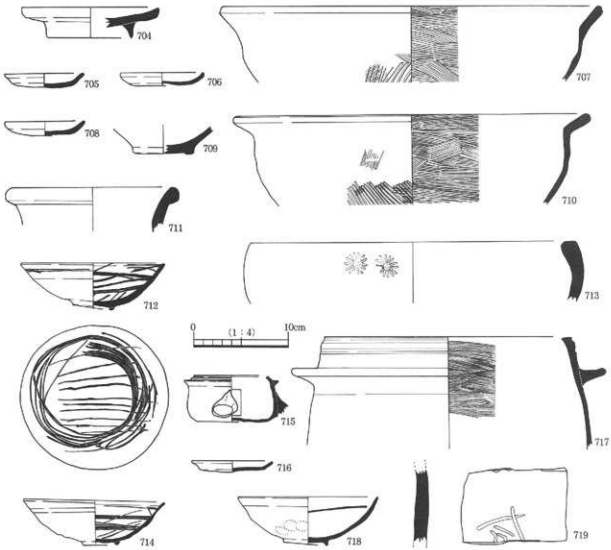
678～681は第２遺構面ベース層より出土した。678は天目茶碗、679は口縁部を折り返し、削り出し高台の陶器皿である。瀬戸窯と思われる。内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。680は瓦質羽釜と思われるが、炭化が足りず淡褐色を呈する。口縁部に穿孔をもつ。

682～698は第３遺構面ベース層の遺物である。瓦器椀（682・686）はⅢ－３型式で、青磁・白磁は高台を削り出して作り、底部は厚みをもつ青磁碗Ⅴ類のものである。685・690はいずれも須恵質の甕で、外反する口縁部と平らな口縁端部をもつ。外面タタキ調整。瓦質製品はほぼ同法量の瓦質小壺が２点（695・697）出土した。ミガキは認められない。693・694は瓦質羽釜で、693は鍔部より上が短く直立するもので、おそらく三足であろう。698の土師質鍋は外面タタキで、口縁部のみタテハケメ、内面ヨコハケメ。

699～711・713・717は第３－ｂ遺構面ベース層より出土した。瓦器椀（699・700・702）はいずれも



第113図　４Ａ区包含層土器（１）



第114図　４Ａ区包含層土器（２）

調査部中心付近で出土した完形品で、外面のミガキが残り、断面三角形の高台のⅡ－３～Ⅲ－１型式のものである。この層出土遺物中最古の時期を示す。

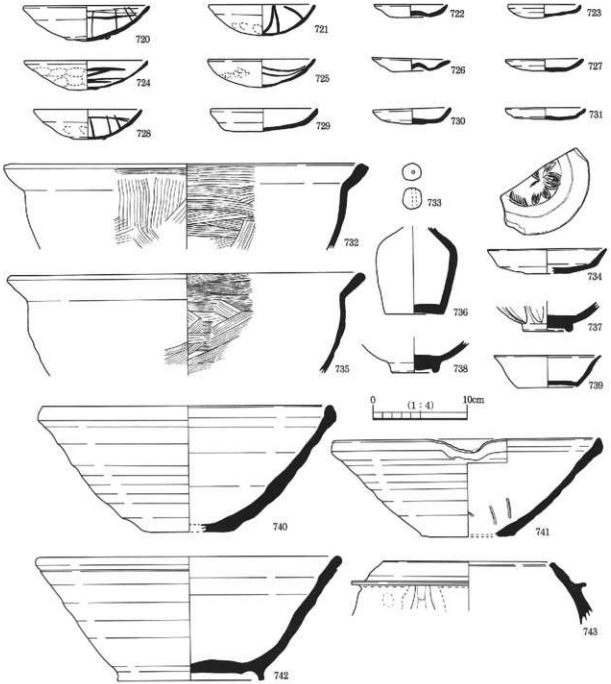
704は土師器の台付皿で、細く高い高台と厚い皿部をもつ。土師質鍋の707は外面ハケメ、710は外面タタキの後ハケメを施す。713は瓦質火舎で内外面ともミガキの後、外面にスタンプ花文を押す。717は瓦質羽釜。

第３－ｂ遺構面ベース層は679・700・702の瓦器椀のように古い型式のものも含むが、おおむね14世紀後半を中心とする年代と考えられる。

第５遺構面以降は水田遺構になることもあり、出土遺物が極端に少なくなる。瓦器椀の第４遺構面ベース層出土の712、第５遺構面直上砂層出土の714・718とも和泉Ⅱ－３型式のものである。714・718は完形で、近い位置から出土した。716の土師皿も、瓦器椀と同時期のものである。715は瓦質羽釜のミニチュア製品であり、これのみ第５遺構面ベース層遺物中時期が新しくなるように思われる。混入だろうか。

719は第６遺構面ベース層より出土した甕の体部片で、胎土や淡黄色釉から常滑の製品と考える。ヘラ状工具で字が刻まれており、一部破損するが、おそらく「合」の字だろう。

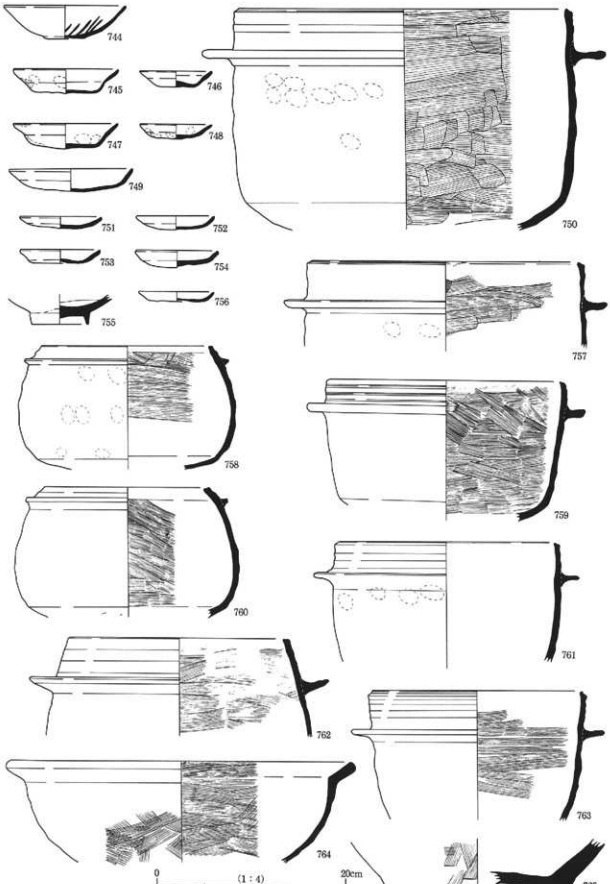
第３遺構面土坑124でも土器が一箇所にかたまって出土した。



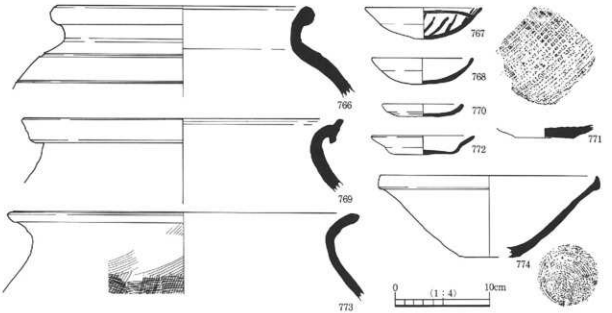
第115図　4 A区土坑124土器

720・721・724・725・728の瓦器椀は張り付け高台の痕跡を残すⅣ－1型式と全くもたないⅣ－3型式の型式差をもつ。Ⅳ－1～Ⅳ－3型式の範囲におさまる。土師皿（722・723・726・727・729～731）も内弯するもの、底部が盛り上がるものなど数タイプ存在する。732・735は土師質鍋で、732は外面に粗いタテハケメをもつのが特徴である。733は土錘、736は土師質の小壺で、乳灰色で一部焼成不良、頸部から口縁部にかけて破損する。734・737・738は青磁で、734は内面見込みに圏線を、その中に花文を刻む龍泉窯皿である。739は白磁皿。

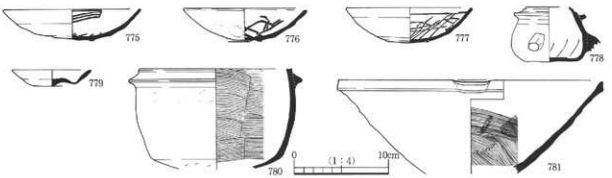
740～742は東播系こね鉢で741は内面に櫛状の工具痕が残る。741・742とも口縁部が肥厚気味になる14世紀以降の型式である。742は口縁端部が丸く、外に張り出す器形のこね鉢である。内面は剥離著しい。高台がついたこね鉢は伽羅橋遺跡出土のものに類例がある。東海系の渥美・常滑系の鉢である。



第116図　4 A区溝871・溝265・土坑582他遺構土器



第117図　４Ａ区土坑643他遺構土器



第118図　４Ａ区第５遺構面遺構土器

743は瓦質三足。

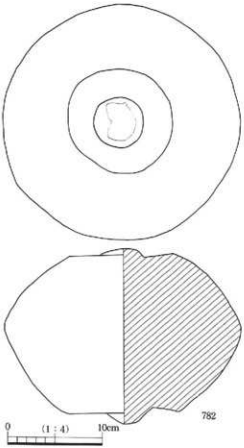
744～774は第３－ｂ遺構面、第４遺構面により出土した土器で、瓦器椀・土師皿大・小の器種構成をとる。また、土坑582では多数の瓦質羽釜が出土しており、出土状況からは分からなかったが、これらの羽釜を重ねて井戸枠としていた可能性もある。750は溝267の、757～763は土坑582の、いずれも瓦質羽釜である。細い鍔部とその上には数個の段をもち、内面には横方向のハケメ、外面は粘土紐の継ぎ目をナデ消した指頭圧痕が残る。758・760は瓦質三足によくみられる、短い口縁部と底部にいくほど横に張り出す体部をもつ。762も口縁部がやや長くなるものの下に張り出す。それ以外は直立する口縁部をもち、体部も下方にいくほどすぼまる器形をとる。

その他、土坑643では陶器や瓦質の甕が多く出土する（766・769・773）。766は口縁部丸く肥厚する三筋壺であり、769は口縁部を内部に折り曲げる。土坑643ではその他、瓦器椀・土師皿・東播系こね鉢も出土する。

771は瀬戸のおろし皿である。底部糸切り底で、回転ナデ成形、内面は粗いおろし目が刻まれる。底部以外に淡緑色釉薬で施釉される。

以上の土器は瓦器椀がⅣ－３～Ⅳ－４型式の様相を示すなど、いずれも14世紀中頃の時期を示す。

第５遺構面は水田遺構となるため、遺物量が少なくなるが溝などより、多様な土器が出土した。



第119図　１Ａ区河川2410五輪塔

瓦器椀（775～777）は高台をわずかに残すⅣ－１型式のものである。

溝1557から瓦器椀の他、ヘソ皿化した土師皿（779）、瓦質羽釜（780）、東播系こね鉢（781）が出土した。こね鉢は内面にハケメの痕跡が残る。

778は土坑1790出土のミニチュア瓦質三足羽釜で、４Ａ区第５遺構面ベース層出土のもの（715）と似る。

註

1）伊野近富「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』1995　中世土器研究会

2）『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　1994　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　p.129　Fig4－15　ＳＫ1370出土の瓦質小壺は肩部に一周の波状文をめぐらす。

3）森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯祉群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』3　1986　神戸市立博物館

4）『日本出土の中国陶磁』　1978　東京国立博物館

（２）石製品

782は１Ａ区河川2410より出土した五輪塔水輪部である。胴径25.0㎝、高18.5㎝をはかり、周辺の能勢～妙見で産出する花崗閃緑岩を石材とする。字等の陰刻はなかった。840がこれと材質も類似するが、未製品のようである。五輪塔の他の部分は出土しなかった。

783・784は１Ａ区の第３遺構面包含層あるいはそれより上層の包含層から出土した滑石製の温石である。温石とは石を手に持てる位の大きさの方形に整えたもので、この石を温めて袋等に入れ、懐に入れて暖をとった、つまり昔の懐炉であり、紐など通してぶら下げやすくするために一箇所穿孔されているものが多い。寺院の僧などが用い、「懐石」の語源もここから来たという。加工し易いためか、多くは滑石で作られている。783は石鍋などを転用して素人がつくったものか、加工痕が表裏面ともに多くみられる。

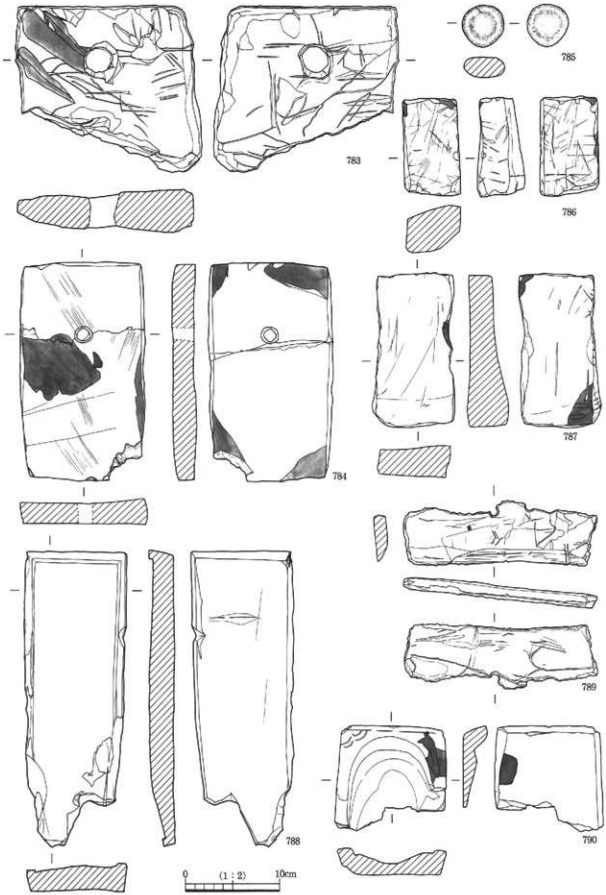
785は第５遺構面Pit2911出土の円板状の石である。径2.2㎝できれいに磨かれており、碁石と考える。

786・787はいずれも砥石である。材質は砂岩と凝灰岩だが、どちらも幅３～４㎝、厚さ２㎝前後と法量的に似る。手に持つ扱いやすい大きさだったのだろう。表裏面あるいは側面にも砥ぎ痕が残る。

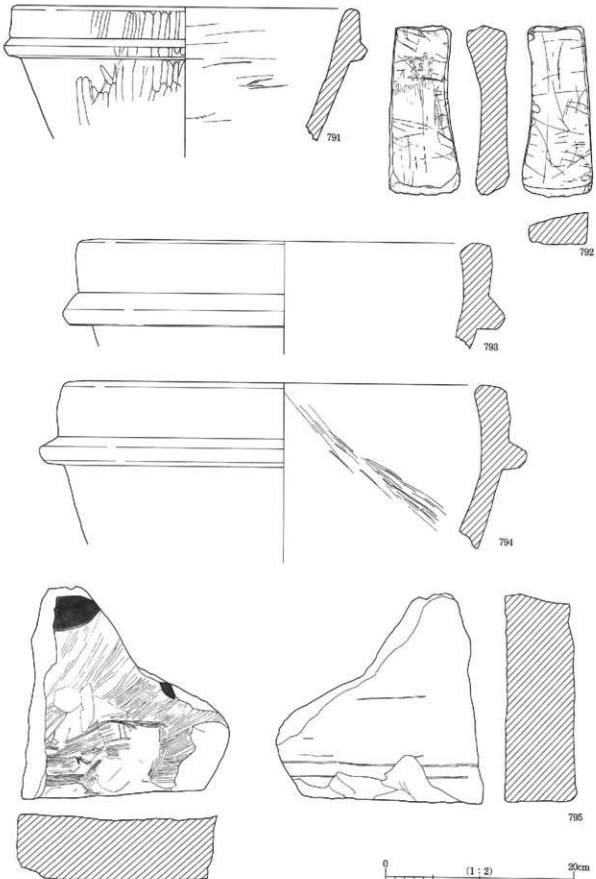
789は第４遺構面ベース層から出土したが、弥生時代の石包丁である。一部破損する。

788・790はいずれも第３遺構面ベース層から出土した硯である。788は海部欠損するが復元長15.8㎝の短冊形で、高さ３㎜幅４㎜程度の細い外縁をもつ。粘板岩製である。790も陸部欠損し、全体の1/3程度しか残存しない。中心は磨滅して凹む。外縁に波頭形の陰刻文をもつ。粘板岩製である。

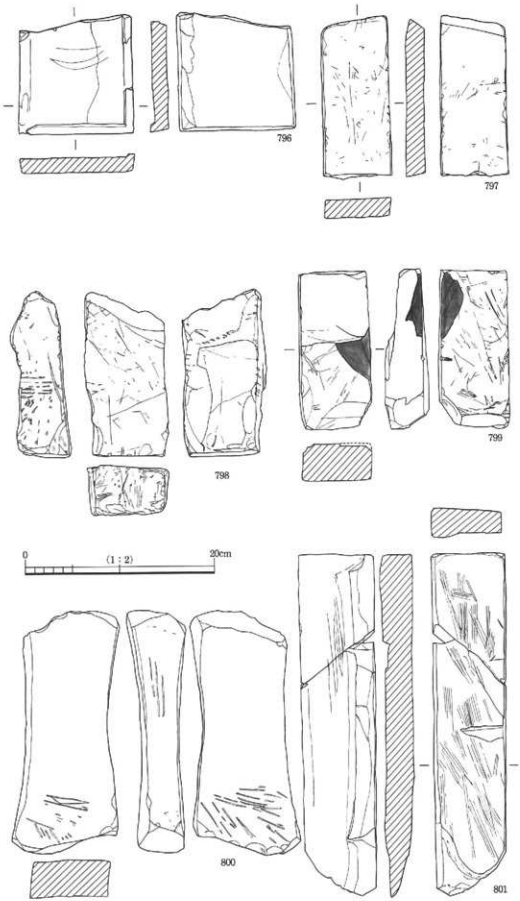
791・793・794は滑石製の石鍋である。口径17～21㎝と異なるが、厚さ1～2㎝の鍔を削り出す。791は



第120図　１Ａ区石製品（１）



第121図　１Ａ区石製品（２）



第122図　２Ａ区石製品

外面に縦方向の仕上げの削り痕が、また、内面にも横方向の削り痕が残る。794も内面に右下がりの削り痕が残り、外面鍔下には煤が付着する。産地は特定できない。

792は凝灰岩製の砥石である。786・787の砥石とやはり似た規格である。

795は角ばった面をもつ石の一部である。磚だろうか。

796～801は２Ａ区より出土した。796は第４遺構面溝2597出土の、黒色粘板岩製硯である。幅４㎜の外縁をもつなど788の硯と似る。

797～801はいずれも砥石である。798はホルンフェルス製、797・799・800は凝灰岩製で、やはり幅３～４㎝、厚さ２㎝前後と似た法量をとる。

802～834は３Ａ区出土の石製品である。802は３Ａ区溝203より出土した円板状の製品である。粘板岩製で、石が板状に剝離しかけており、中心部に穴があるようにも見えるが、定かでない。

803は土器溜54より出土した、直径2.3㎝の円板状製で碁石と考える。黒色粘板岩製できれいに研磨される。

804は石錘で、三角錐の形をとり、そのうちの２面を貫通する穴をもつが、穴は平行でなく斜め方向に穿孔される。

805は落込54上層より出土した、滑石製の温石である。上方に穿孔をもち、強い反りをもった形をとる。転用して温石に作り替えたものか、外面には粗いのみ痕が残り、内面にも刃物傷などが見受けられる。

806～809は砥石である。809は今までになかった大型品であり、六角形に面取りされている。また、807は粘板岩製のきわめて目の細かい砥石であり、厚さも１㎝前後と薄い。

807や809は特殊な砥石ではなく、玉櫛遺跡で出土した砥石は少なく見積もってみても70点以上あるが、大きさで大・中・小の３つに分類できる。大が809や828のようなもの、中が数量的に最も多く、幅３～４㎝、厚さ２㎝前後のもの、小は806や820のような指先で持てるような大きさのものである。また、肉眼でみる限りでも、大・中・小各々の砥石の石材は大きさ毎に定まっているようである。

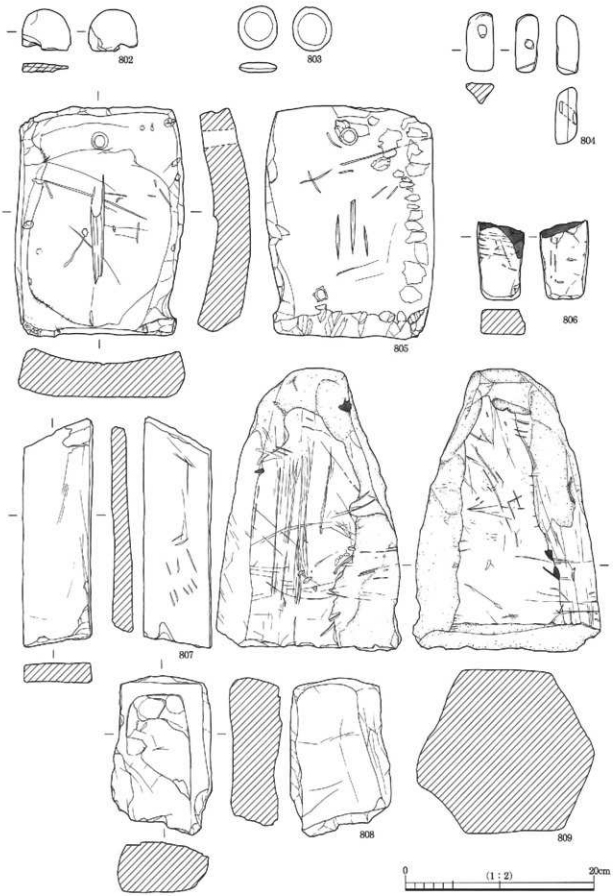
京都教育大学の井本仲虞先生に石材の肉眼鑑定いただいたところ、砥石について有意義な教示を得た。現代においても砥石は、石材の粒子の大きさによって、大まかに砥ぐための荒砥、第２段階の中砥、仕上げに使用する仕上砥の３種を用いるのだそうである。各々の用途に応じて石材も異なり、荒砥は砂岩、中砥は貢岩や凝灰岩、仕上砥は粘板岩と次第に目が細かくなる。

玉櫛遺跡で出土する砥石の石材も砂岩・凝灰岩・粘板岩に限られ、大～中型品は砂岩・凝灰岩、中～小型品は凝灰岩・粘板岩である。砥石が出土するのは主に13世紀後半以降の遺構面からであるが、この時期から用途に応じた砥石の使い分けがなされ、また、それらが製品として流通していたと推測できる。さしずめ、807は仕上げ用の砥石であろう。用途によって、石材を使い分けていたこと、砥石の寸法を統計的に調べて、生産地にまで言及した報告がある[1]。

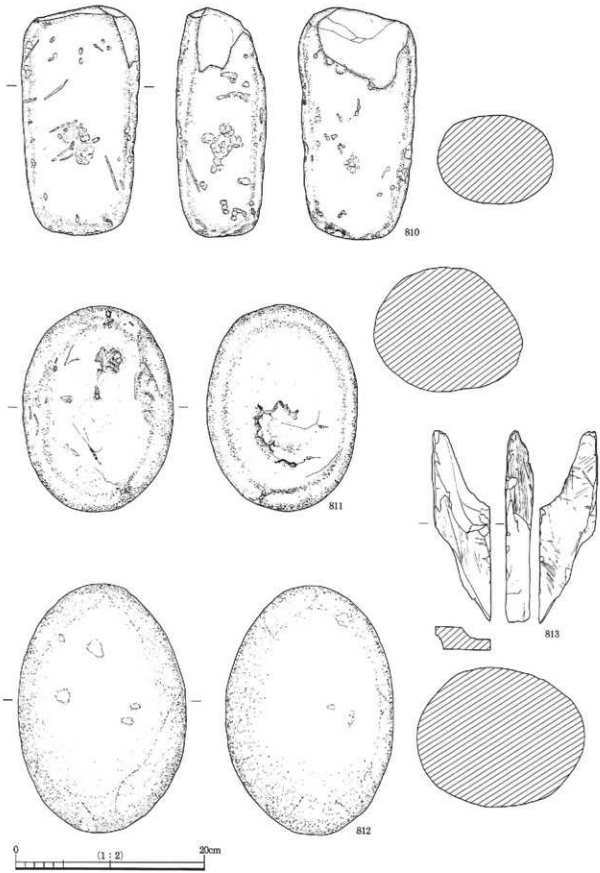
810～812は第４遺構面溝203・溝204・溝205より出土した。810は磨製石斧で一部破損する。玉櫛遺跡は弥生時代の拠点集落として有名な東奈良遺跡の南東約１㎞のところであり、後世の遺構面から石器やサヌカイト剝片が少量ではあるが出土する。

811・812は磨石として使用したものだろうか。811は砂岩であるが、812は瑠璃斑岩といって、黒曜石に斑状に石英などの塊を含んだ石である。

813は812と同じく溝205から出土した珪質粘板岩製の砥石である。板状に上下とも剝離、欠損する。



第123図　3 A区遺構石製品



第124図　3 A区溝203・溝204・溝205石製品

814は黒色粘板岩製の短冊形硯である。使用による磨滅がみられる。788の硯と法量、形態ともきわめて類似する。規格品としてこの硯が流通していたと考えられる。

815・816は砥石であり、815は酸性凝灰岩、816は細粒砂岩である。

817は硯の外縁部の一部と思われる。818は滑石製品で、一端は破損するが２つの穴をもつ円弧状の製品だったと考えられる。用途は定かでない。

819・820は砥石である。819は凝灰岩製で、四面とも砥石として使用されていた痕跡が残る。820は小指大の小型のものである。

821は包含層より出土した石包丁である。刃部を欠く。

822・823は石鏃、824は剥片でいずれもサヌカイト製である。824のみ第９遺構面ベース層からとプライマリーな状態で出土した可能性があるが、以外は平安時代以降の遺構面からの出土である。

825～827はいずれも滑石製の石鍋である。825は持手をかけるためのものか、口縁部に穿孔をもつ。いずれも鍔を削りだして作り、鍔から下には煤が付着して実際に使用されていたものと言える。827は口縁部から底部まで残存し器形を判断できる好資料だが、口径23㎝に対し器高8.4㎝と低い。図化し得たもの以外にも、石鍋と思われる破片が多数出土しており、相当数の石鍋が煮炊具として流入していたと思われる。産地は特定できないが、石鍋の主要な生産地は長崎県西彼杵半島であり、遠隔地からの製品流通が行われていたことがうかがえる。

また、791・793・794と825・826・827の石鍋全て、形態的には木戸雅寿の編年案[2]によればⅢ－ａ・Ⅲ－ｂ・Ⅲ－ｃ型式に属する。13世紀から14世紀のものと考えられる。

828・830ともに大型の砥石である。どちらも酸性凝灰岩である。

831は３Ａ区第８遺構面ベース層より出土した凝灰岩製の鋳型である。やや先細りの長方形をなし、一面に溝状の凹みが入る。何の鋳型かは不明である。

832～834は全て砥石である。

835～842は４Ａ区出土の石製品である。835・837は黒色粘板岩製の硯である。835は２分の１以上欠損するが、長方形をなし、上部外縁部には波頭形の陰刻文が入る。837は四葉形で左右に切れ込みが入る。削られたものか、外縁部は高さを失っている。

836・838は中型・小型の砥石である。全面に砥ぎ痕跡が残る。

839は滑石製品であり、原形が湾曲した球状の器形をなしていたと考えられることや、外面に幅２㎝程度の平行線の痕跡が残ることから、石鍋の一部を切り取り、鍔部分を削り取って何かに転用しようとしたものと考えられる。鍔部だったところに交差するのみ痕が残る。

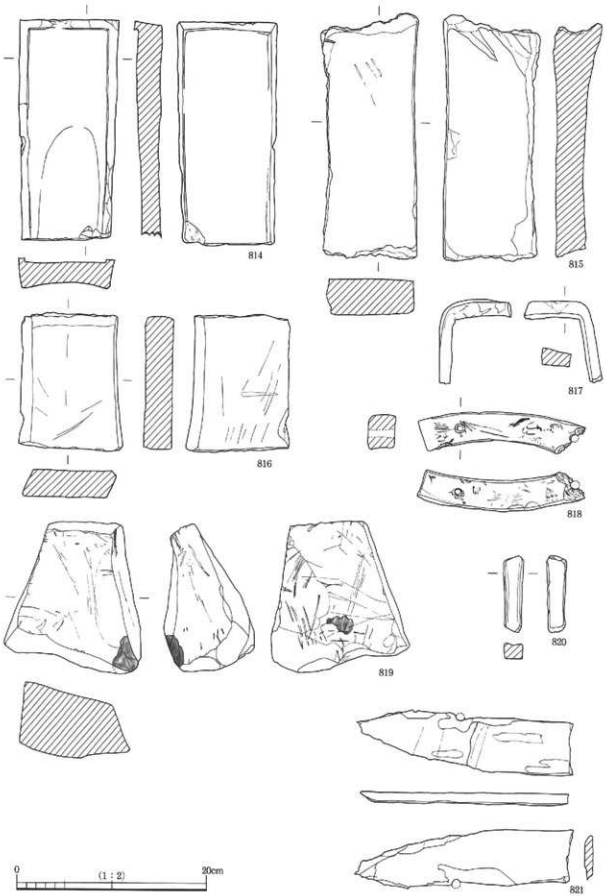
840は球状に磨かれた石であり、周辺の能勢～妙見を産地とする、花崗閃緑岩でできている。

841も小指大の小型の製品であるが、表裏面共に刃物痕が残るので砥石と考えられる。珪質粘板岩製である。携帯用の砥石だったのだろうか。

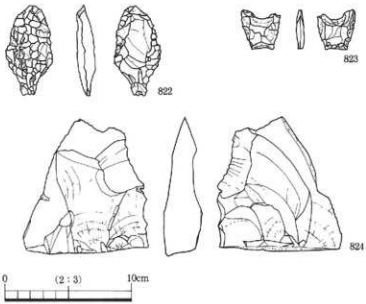
842は断面三角形をなす、稜線をもつ製品である。一見瓦のようにみえるが、砂質凝灰岩製である。一側面は生きていることから、容器などの底部ではなく、磚のようなものと推察するが類例をみない。

註

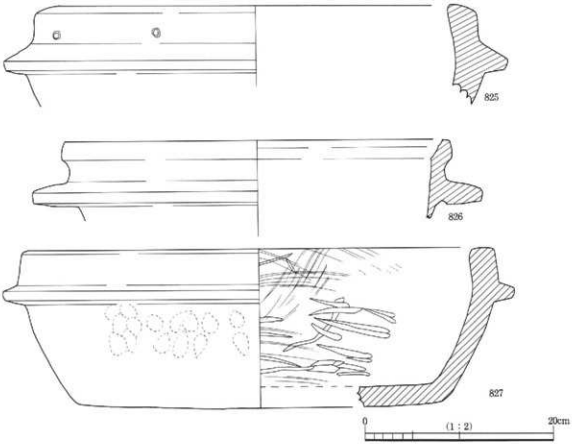
1）「４．石製品　　砥石の分類と用途」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅴ』　1996
広島県草戸千軒町　遺跡調査研究所



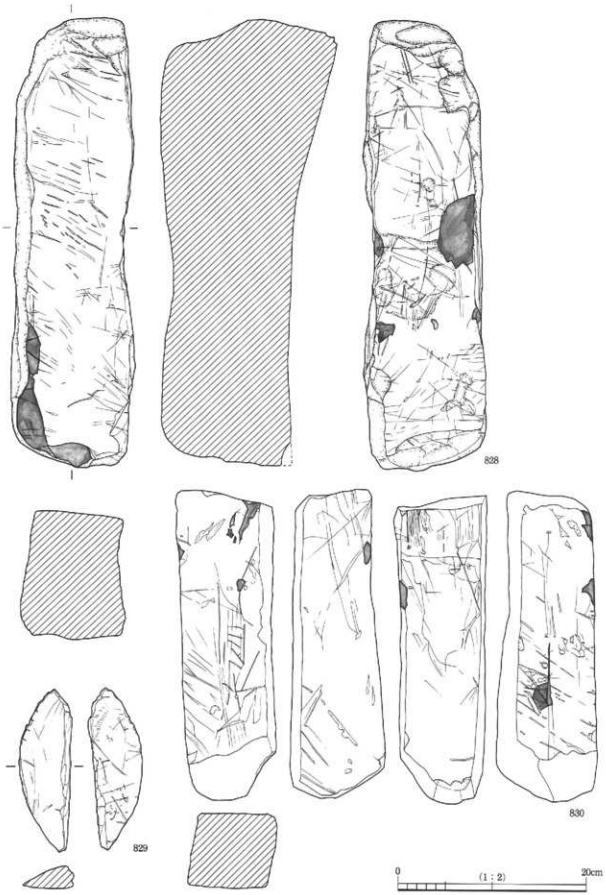
第125図　３Ａ区石製品（１）



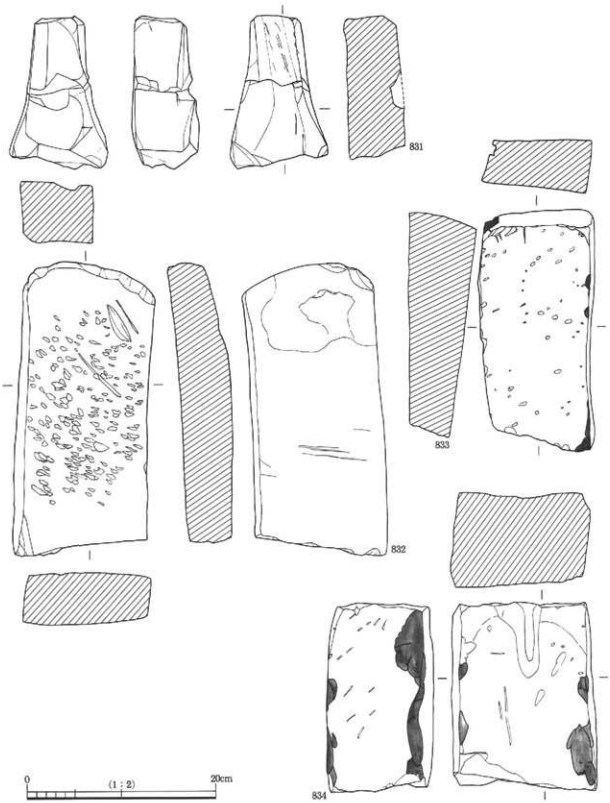
第126図　3 A区石器



第127図　3 A区石鍋

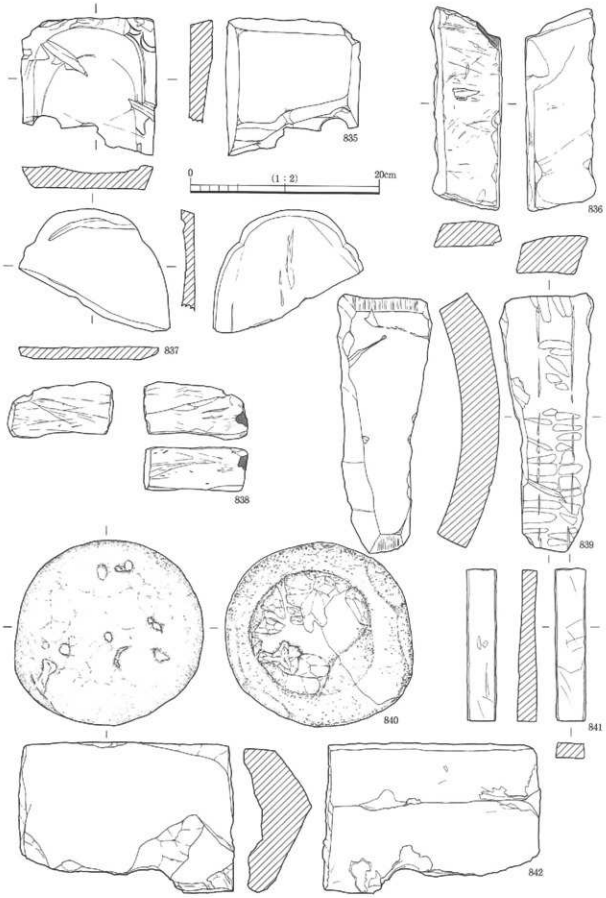


第128図　３Ａ区石製品（２）

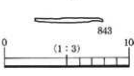


第129図　3Ａ区石製品（3）

2）木戸雅寿「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』1995　中世土器研究会
木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』　1993　中世土器研究会



第130図　４Ａ区石製品



第131図　1A区河川2410卒塔婆

（3）木製品

1）1A区の木製品

843は河川2410より出土した卒塔婆である。頭部が五輪塔形で厚さ3.5㎜の板に墨書で「𑖀南無阿弥陀佛右趣者為性□□三七日追善」と書かれてある。[1]「𑖀」は文殊菩薩を表す梵字で、為性のあと二字程度かすれて判読不明だが、下の字は「堂」の可能性がある。人を表す文字が入ると思われる。死後七日毎の追善供養の三七日、つまり死後二十一日の追善供養で使われた卒塔婆であろう。現存長48.0㎝であるが、末語の「善」の字の下半分が欠けるのみなので50～60㎝であったと推測する。この河川の同じ層からは五輪塔の水輪部も出土しており、墓域の一括遺物といえよう。（第119図782）

844、845、846はいずれも桶棺墓2555の側板である。長方形の板を三十数枚箍でつなぎあわせたもので箍の痕跡が残る。短辺の一辺は底板の円形のカーブに合うように、円弧状に円く整えられている。長さが30～50㎝未満と底板の直径に比べると短いが、これは後世の破損を受けたためで、短辺のもう一辺は欠損する。

847は桶棺墓2555の底板で直径約50㎝である。蓋板は検出時から存在しなかった。側面の何箇所かに木釘穴がみられることから、9枚の細長い板を木釘でつなぎ止めて円形の底板としたものであろう。

848は箱棺墓2644の横木桟である。同形のものがもう一本存在し、発掘時には長辺部分の木片もわずかに残存していたので、四本の木を組み合わせて枠板とし、中央および両端くびれ部に木釘穴が残ることから、木釘で底板に打ちつける構造をとっていたと思われる。底板は板というより幅が0.5～1㎝の竹を網代状に斜めに交差させて編んだもので、箱というよりは籠と呼んだ方がいいかも知れない。中央を線対称として穿孔された2箇所の穴も縦木を補強する桟を通すためのものと考えられる。中央部の凹み部分の用途は不明である。

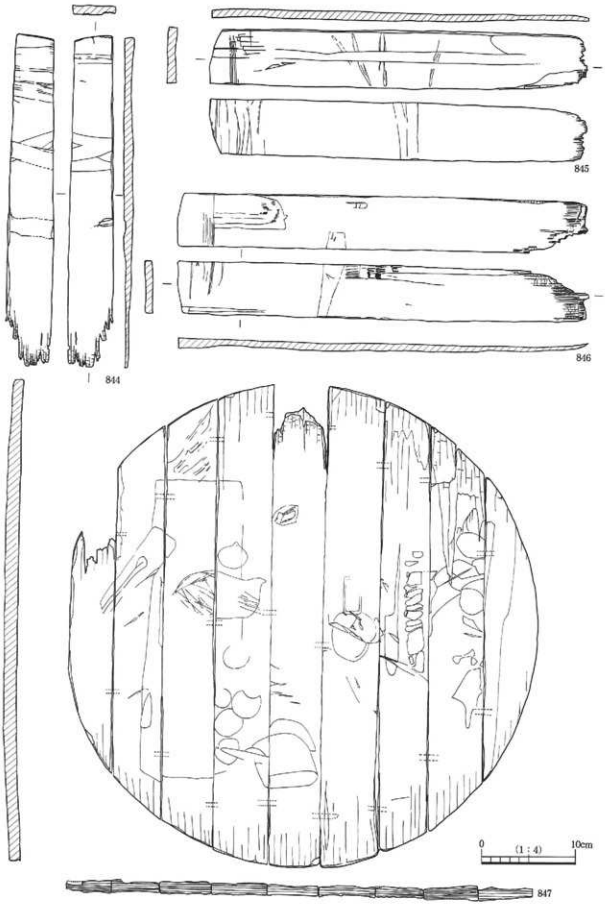
849は箱棺墓2914の内部に納められていた漆器椀である。内外面とも黒漆塗で、底部外面に赤漆で「聖」の字が手書きされていた。口径10.2㎝、器高4.2㎝と小ぶりの椀であるが、丸味を帯びた器形で、口径に比して大きな底径をもつ。型式的にも15世紀以降のものである。

850～853は桶棺墓2554の、852は蓋板、853は底板、850・851は側板である。853は5枚、852は破損著しいが、木釘の位置から推定して4枚以上の板をつなぎ合わせて円形の板としていることが分かる。2枚の板をつなぐのに上下2箇所を木釘で止めていることが分かる。直径約34㎝である。

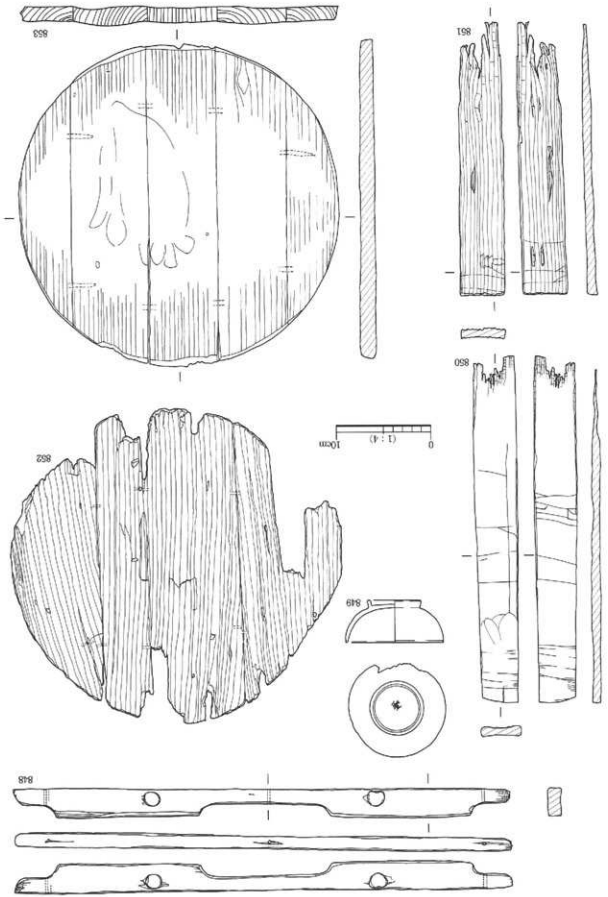
852のみ樹種鑑定を行っているが、クロマツ、アカマツなどの二葉松類と判明している。

853の底板の周りを850・851の側板28枚がとり囲んでいた。側板は現存長が30㎝弱のものが多く、やはり一端は欠損している。桶棺墓2555と同じく、一端は丸味を帯びて整えられ、外面には箍の痕跡が残る。

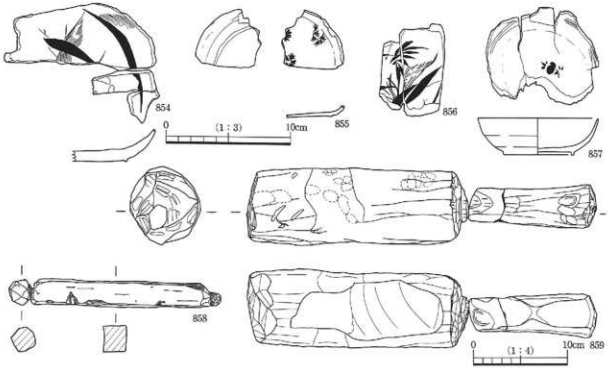
854・855は河川2937より出土した。854は漆器椀、855は漆器皿である。いずれも底部から体部の一部分が残るのみで、内外面とも黒漆で、赤漆で手描きの文様が入る。854は鳥であろうか、855は撫子らし



第132図　桶棺墓2555木製品



第133図　箱棺墓2644・箱棺墓2914・桶棺墓2554木製品



第134図　１Ａ区落込3015木製品・１Ａ区漆器

き花文である。

856は第４遺構面の土坑3596の漆器椀である。内外面黒漆地に赤漆で植物文を描く。

857～859は第６遺構面の落ち込み状遺構3015より出土した。857は漆器椀で底径5.4㎝、復元口径9.8㎝をはかる。内外面黒漆塗りで内面見込みにのみ赤漆の花文が紋章的に入る。手描き植物文の場合、椀の内側や側面の両方に写実的に描かれるものが多く、ワンポイント的に入るのは珍しい。

858は用途不明の木製品である。四角い角材の一端は断面八角形で、三角形や菱形に面を削り出したつまみがつく。もう一端は欠損しているが、細く削り出してやはりつまみ状のものを作り出していた様である。

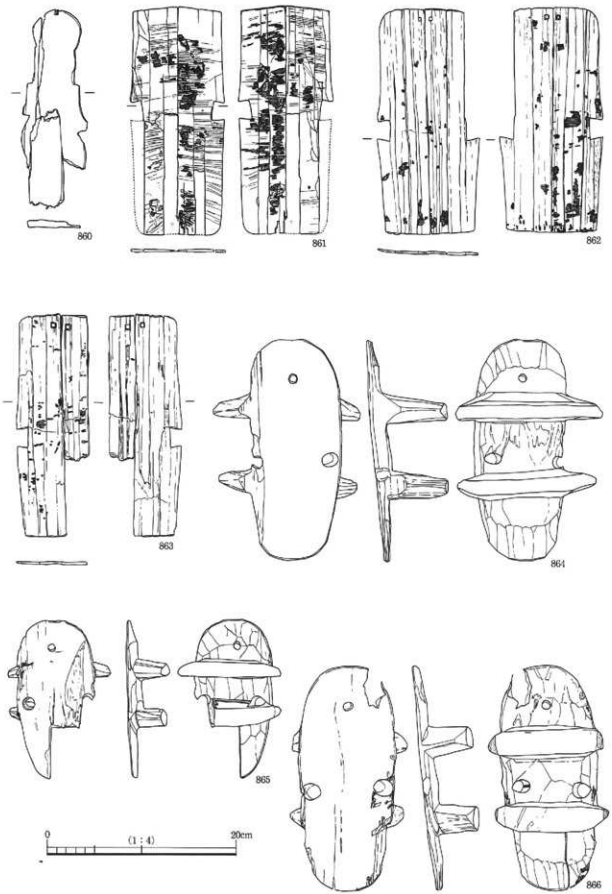
859は槌である。叩部と柄部が離れた状態で出土したが、元来は一つの材を削り出して作ったものである。長さ37㎝で、柄部や頭部分には粗いのみの加工痕が残る。また、かなり使用されたものらしく手で握る部分や叩面の一部には磨耗による凹みがみられる。

860は河川2937から出土した卒塔婆である。五輪塔の形態の頭部のみ残存する。頭部形態も河川2410出土の843と丸味を帯びる点などやや異なる。墨書などはみられなかった。

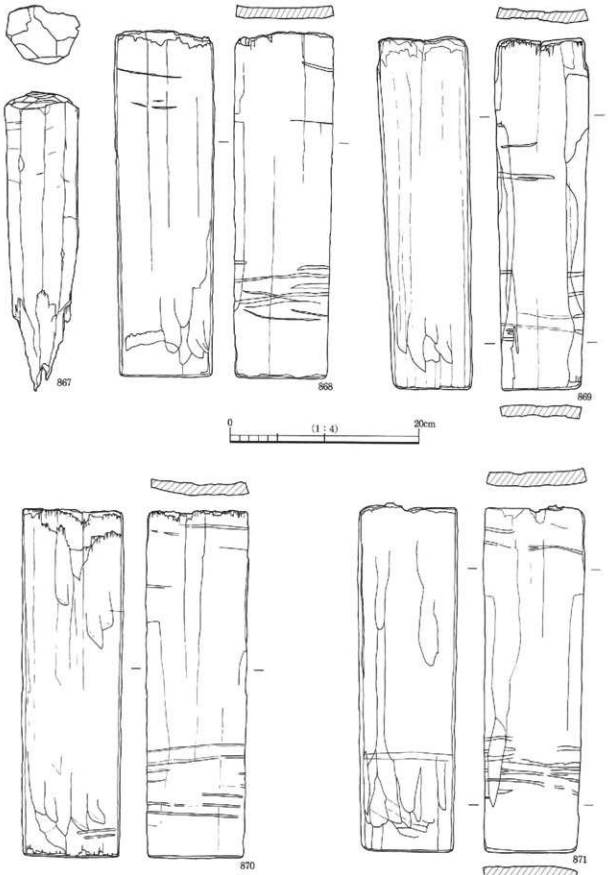
861も河川2937出土の草履芯である。最下層より出土した。左右対称の２枚の薄板で側縁部に切り込みが入る。この芯板に藁などの繊維を巻いて草履として使用していたと思われる。玉柳遺跡では１Ａ区の溝3596や溝3210などでまとまって出土し、残存状況の良いものだけ実測、掲載したが、破片も含めるとかなりの点数が出土した。

多くは芯板に繊維の痕跡が残るだけだが、編み込んだ繊維を観察できるものもあった。形態も鼻緒部分に孔をもつもの、頭部が尖るもの、平坦なものなど様々である。861は頭部が中心を頂点とする山形をなし、孔はもたない。長さ24.1㎝、幅10.0㎝、厚さ2.5㎜である。

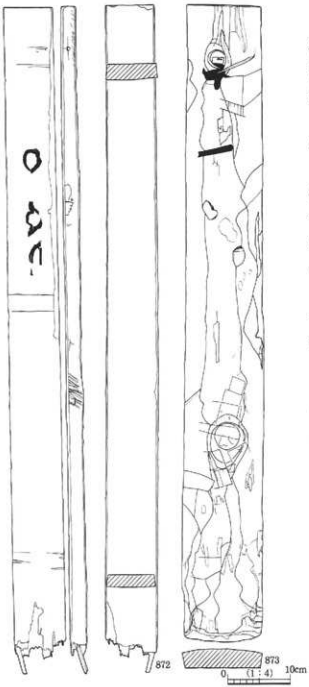
862～866は第６遺構面溝3596出土の草履芯・下駄である。溝3596は溝3595から派生した浅く広がる溝で多数の木製品が出土した。



第135図　１Ａ区遺構木製品



第136図　１Ａ区井戸3635井戸枠桶板他



第137図　２Ａ区井戸2599井戸枠桶板

862・863はいずれも方形の穴を穿ち、隅を丸く面取りした似た形態の草履芯である。一対のものだったかも知れない。幅２、３㎜の藁状のものが付着し、左右に藁を巻いていたことが分かる。

864・865・866は各々別個体の下駄の片足分である。いずれも連歯の下駄である。

864は台部は長円形をなし、歯部が台形状に下方に広がる形をなす。歯の高さが6.2㎝と高歯の下駄で、前歯と後歯の高さは揃っている。樹種鑑定の結果、ヒノキ、サワラなどのヒノキ科の木材であることが分かった。

865は長さ16.6㎝、幅8.2㎝と小さく子供用の下駄であろう。長円形の台部に下方に広がる歯をもつ。緒間の長さもほぼ等間隔である。

866は864と長さ・幅とも似るが、歯が台部から余り出ず、垂直におりる形をとる点が異なる。また、前歯と後歯の高さがかなり異なり、使用による磨滅のあとをうかがわせる。

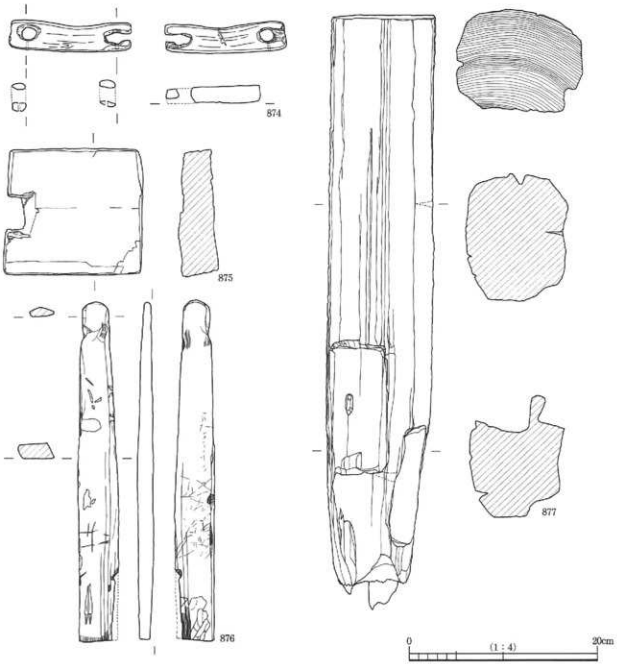
868～871は井戸3635の桶側板である。井戸3635はこの側板14枚を竹の箍で結わえた桶を枠とする井戸であった。よって、これらの板の外面には箍の痕跡が残る。また、いずれも長さ36～37㎝、幅8.0～11.0㎝、厚さ平均1.3㎝の板材に整えられており、底板に沿うようにカーブをつけて仕上げられている。また、上方と下方の幅も１㎝以上異なる。１枚１枚の板をはめ込んだ時、上方の径が大きくなるためであろう。上方は一部破損するが、長さは大幅には変わらないと思われる。

867は第７遺構面のPit3471から出土した掘立柱建物の柱木である。径15～16㎝の木材を八角形に面取りしたものである。現存長63.2㎝をはかる。

２）２Ａ区の木製品

872・873は第３遺構面の桶枠組井戸2599の桶側板である。井戸2599は桶を４段にも積み重ねた井戸で、一周20枚前後の板を竹の箍で結わえてあった。１～４段目の側板の合計は83枚である。そのうち、墨書で記号らしきものが外面にあった２枚だけを図示し、以外は法量を表にまとめた。（第５表）

872は長さ106.2㎝、幅8.2㎝、厚さ2.4㎝の４段目の側板である。４段目の側板は長さが100㎝未満のものから120㎝台までばらつきがあるが、その中では平均値に近いものだろう。外面に墨書で「○」状の記号が３、４個描かれていたが、かすれて一つの単位が不明瞭な部分もあり、文字なのか記号なのか

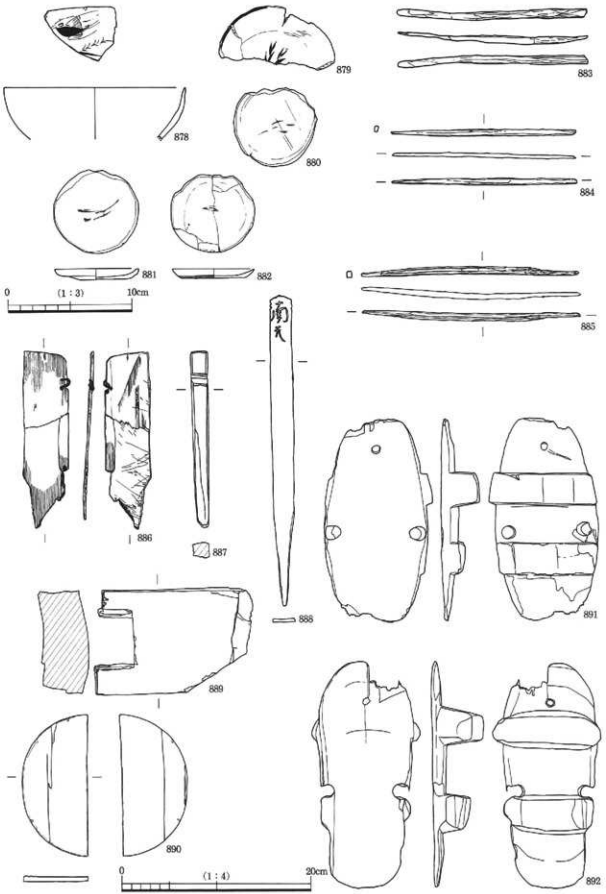


第138図　２Ａ区河川2597・井戸2599・pit2683木製品

も不明である。

873は長さ101.5㎝、幅12.1㎝、厚さ3.0㎝をはかる。１段目の側板で、１段目は計14枚の板で構成され、873が幅最大の側板である。外面は「一」とも読める記号も含め、４～５個の記号ないし文字が墨書されているが判読できない。側面に２箇所の木釘穴をもつ。井戸2599の側板はいずれものみ状の工具で表裏、側面とも滑らかに仕上げられ、円を描くように湾曲させている。外面を箍で締めていた他、側面に木釘や木釘穴が１箇所、あるいは上下２箇所に残るものが多数あり、桶のつくり方を知る上でも興味深い。

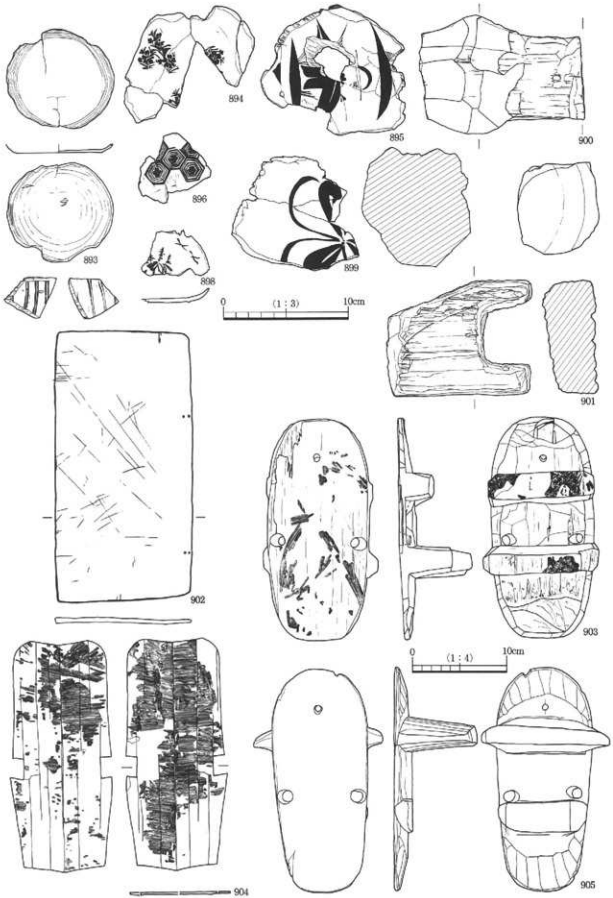
874・876はこの井戸2599の井筒内より出土した用途不明の木製品である。２つが組み合わさった状態で出土した。874の２つの穴の一方は欠損し更に続くと思われる。



第139図　２Ａ区遺構木製品

第7表　箸計測表

番号	挿図番号	遺　構　名	長(cm)	径(cm)	番号	挿図番号	遺　構　名	長(cm)	径(cm)
1		2AE区 第6遺構面 井戸3820	11.8	0.7	51		2AE区 第6遺構面 井戸3827	23.0	0.5
2		〃	12.3	0.6	52		〃	17.9	0.6
3		〃	12.5	0.6	53		〃	22.5	0.6
4	第143図 922	〃	17.6	0.7	54		〃	17.0	0.7
5		〃	17.4	0.7	55		〃	18.0	0.7
6		〃	16.0	0.6	56	第143図 927	〃	16.9	0.6
7		〃	17.2	0.6	57		〃	24.2	1.2
8		〃	18.0	0.6	58		〃	18.1	1.7
9		〃	18.4	0.8	59		2AN9C757、第5遺構面 溝3027	13.5	0.7
10		〃	17.6	0.55	60		〃	23.1	0.6
11		〃	17.9	0.7	61		〃	19.7	0.7
12		〃	20.0	0.55	62		〃	18.7	0.6
13	第143図 921	〃	20.0	0.8	63		〃	19.4	0.7
14		〃	21.1	0.6	64		〃	19.6	0.7
15		〃	20.9	0.75	65		〃	19.3	0.5
16		〃	21.5	0.7	66		〃	19.9	0.6
17		〃	21.3	0.5	67		〃	19.3	0.8
18		〃	20.3	0.5	68		〃	19.6	0.6
19		〃	20.8	0.6	69		〃	19.1	0.5
20		〃	24.5	0.7	70	第139図 884	〃	19.5	0.7
21	第143図 923	〃	29.4	1.0	71		〃	18.8	0.5
22		〃	14.2	0.6	72		〃	18.9	0.6
23		〃	16.3	0.8	73		〃	19.7	0.6
24		〃	17.2	0.5	74		〃	19.2	0.6
25		〃	15.7	0.7	75		〃	19.5	0.6
26		〃	16.6	0.8	76		〃	20.1	0.6
27		〃	17.6	0.7	77		〃	19.2	0.7
28		2AE区 第6遺構面 井戸3827	22.0	0.7	78		〃	19.0	0.6
29		〃	23.1	0.7	79		〃	16.8	0.5
30		〃	6.1	0.5	80		〃	19.7	0.5
31		〃	22.5	0.6	81		〃	18.0	0.6
32	第143図 925	〃	23.0	0.7	82		〃	19.7	0.5
33		〃	23.0	0.5	83		〃	18.9	0.7
34		〃	20.6	0.6	84		〃	18.7	0.5
35		〃	18.5	0.8	85		〃	19.5	0.5
36		〃	14.4	0.6	86		〃	19.3	0.7
37		〃	18.8	0.6	87		〃	18.4	0.5
38		〃	18.8	0.7	88		〃	19.7	0.6
39		〃	18.1	0.7	89	第139図 885	〃	23.1	0.6
40	第143図 926	〃	23.0	0.7	90		〃	17.6	0.8
41		〃	15.3	0.7	91		〃	9.7	0.6
42		〃	14.3	0.6	92	第139図 883	〃	20.1	0.9
43		〃	12.4	0.6	93		〃	8.6	0.6
44		〃	9.0	0.6	94		〃	12.3	0.6
45		〃	9.4	0.6	95		〃	8.1	0.5
46		〃	13.6	0.6	96		〃	9.8	0.8
47		〃	22.8	0.9	97		〃	17.8	0.7
48	第143図 924	〃	23.3	0.9					
49		〃	20.0	0.6					
50		〃	23.3	0.8					



第140図　２Ａ区溝3210木製品

875は河川2597より出土した。長方形あるいは方形の厚みのある板の中央に切れ込みを入れるか、あるいはほぞ穴をあけた同形態のものが河川2597・河川2598や全調査区の柱穴より多数出土している。最初河川の岸部分で多く出土したため、建築材を縄などかけて運搬しやすくするために穴をもたせ、不用になったら切り落とす、鼻緒かと推測したが、柱穴に平らな面を上に向けた状態で出土する例がみられることから、掘立柱建物の柱を支える礎板の役割をしたとも考えられる。ただしその場合、中央のほぞ穴は何の機能をもっていたのだろうか。

877は第４遺構面Pit2683の柱木である。四角形に面取りされた柱で下方の隣り合う２面に長方形の凹みをもつのが特徴である。その２つの穴を貫通する横方向の木釘穴がみられる。木釘穴は上方にもみられる。

878は井戸3645－１から出土した漆器椀、879～882は溝3028から出土した漆器皿である。いずれも内外面ともに黒漆塗りで赤漆で文様が手描きされている。878は体部外面に鳥と草文が、879は内面見込みに笹の葉文様がみられる。880～882は内面見込みに一筆描きで「彡」という文字とも記号ともとれる文様がかかれる。法量も揃っており、規格品として流通していたと考えられる。

883～885は溝3027より出土した箸またはその未製品である。溝3027からは多数の箸が出土している。長さが20㎝未満のものから20数㎝とまちまちであるが、いずれも四面を削り、両端の先端は尖らせ、太さ７㎜程度に仕上げられている。溝3027他から出土した箸のうち計測可能なものは表にまとめた。（第７表）883は加工途中の未製品であろう。

886・887は井戸3645－１の出土品で、886は曲物底板で桜の皮の綴じ紐がわずかに残存する。887は用途不明の棒状製品で頭部に切れ込みをもつ。

888は井戸3566から瓦器椀などと共に出土した卒塔婆である。１Ａ区出土の卒塔婆とは形態が異なって山形の頭部に切れ込みが二段入るだけであり、長さも32.8㎝と小型品である。先端を尖らせてあるのは直接土に突き刺したものであろう。「南无（無）」と墨書され、その下にも数文字あるようだが判読できなかった[2]。

889は第５遺構面Pit3524から出土した。先の875と同形品だが、875に比べ中央の切れ込みが大きく入り、また長方形の一角が斜めに切り落とされている。

890は溝3178出土の円形曲物底板である。

891は井戸3025、892は井戸3580出土の下駄である。楕円形あるいは長円形の台部に、垂直に伸びる歯部をもつ。両方とも前歯より後歯の方がすり減っている。

第５遺構面溝3210からは大量の木製品が出土した。漆器や下駄など日常生活品が数多く出土する。

893～899は漆器で893、898が皿、以外は椀である。893は黒漆塗りの無文で、底部にろくろ挽きのあとがみられる。また、894の漆器椀の花文と896の漆器椀の亀甲文は手描きでなく、印判を押しつけて連続した同じ模様を繰り返すスタンプ文である。

900は宝珠形に頭部をつくった木製品である。901も中央に切れ込みをもち、一端を斜めに切り落としている。

902は長方形の曲物底板で端に２つずつ側板と接合するための綴じ穴をもつ。また、まな板に転用されたものか、無数の刃物痕が残る。

903・905は下駄で、903の歯部が垂直にのびるのに対し、905の歯部は台状に広がる。903の歯部と台部の上面に藁状の繊維の付着がみられた。歯部は直接地面に接する部分なので繊維が付着するのは分か

るが、台部へ付着するのは泥湿地での使用を示すものだろうか。あるいは、足にあたる部分を草履のように覆っていたのだろうか。ただ鼻緒穴を通す繊維の痕跡や全体の押圧痕はみられなかった。

904は草履芯で頭部は中心に向かって凹み、下部は逆に中心がV字状に出る形態である。この草履芯には表裏ともに繊維がよく残り、芯板のみでなく、板草履の原形を観察できる好資料である。横方向の繊維は中心に向かって左右それぞれ肩上がりに巻かれている。これによると2枚の芯板を包み込むように藁が巻かれていたのではなく、1枚ずつ分けた状態で巻いていたことになり草履として使用するには不自然な気もする。また、縦方向には三つ編みのように繊維を何本ずつかに束ねねじって編み込んでいるものが何箇所かにみられる。しかも、これは鼻緒や草履ができてから上にかけられた縄ではなく、三つ編みの編み込みをする際に横方向の繊維を何本かとっては通しているのである。つまり、織物の縦糸と横糸のように、縦の縄と横の繊維が交差するのである。縦に縄状のものが何本もあったのかは不明であり、また、使用する際にもボリュームがあると履きにくく思えるが、肉眼で観察する限りはそのようである。

906は長さ84.1㎝もある木製品で、上端より23.2㎝までのみ幅広になって棒部分の4倍の幅をもつ。用途は不明だが、建築材の一部と思われる。

907は第5遺構面Pit3524の柱木である。残存長71㎝、直径11.6㎝をはかる大きなもので、丸く磨かれ、上部は円錐状に削って尖らせてある。先端より12㎝ほど下がったところに、長方形の穴が設けられている。横木を通していたのであろうか。樹種鑑定の結果、アスナロ・サワラ・ネズコなどヒノキ科の樹種との見解を得た。

908～910は第5遺構面井戸3645－1より出土した。そのうち910の2枚については形や側面の木釘穴が合致したため同一個体とみなし、908、909については910とは一辺の形状が異なることから別個体とみなした。あるいは908と909は同一個体かも知れない。908と909は円形曲物底板の一部と思われる。板の端に各々3～6箇所穿孔されているが、底板同士を止める穴としては大きく、後に何かに転用されたのかも知れない。

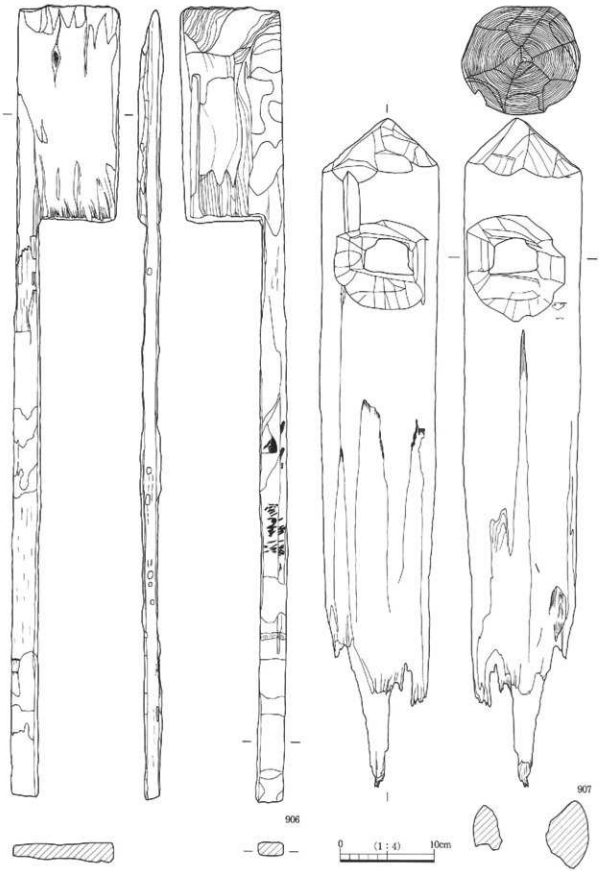
910は長方形の板を2枚組み合わせたものだが、短辺の一辺は円形を描き、もう一辺は途中で欠損しているが、板部からのびる幅3㎝強の軸部をもつ。2枚の板の接する部分には、2枚をつなぎ合わせるための穴が上下1箇所ずつと、側面にも上下2箇所に木釘穴をもつ。また、その対辺にも中央部と下部に各々2個ずつ、合計8個の穴をもつ。容器の底板とするには軸部の意味が不明であり、正確な用途は分からない。

911は第5遺構面井戸3031の折敷底板である。厚さ5㎜の薄い一枚の板からなりほぼ正方形である。1辺に2箇所ずつ、側板を止めるための小穴が2ないし3個穿孔されている。表裏面共に多数の刃物痕がみられ、まな板への転用が考えられる。

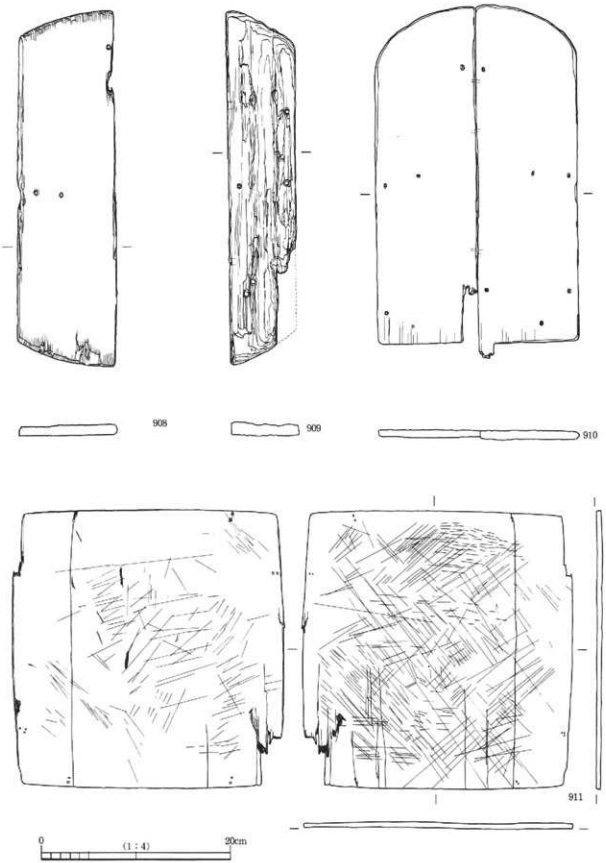
第6遺構面の井戸3820・井戸3827・溝3916からも多数の木製品が出土した。

912、913、928は井戸3820出土の漆器である。いずれも黒漆地に赤漆で文様が描かれる。912は椀で内面見込みに花文を手描きする。花弁の表現などに一部赤漆を塗ったあと掻き取った様子がみられる。913は皿で草の葉を内面に描く。928は漆器椀の原形をとどめる優品で、体部内外面、内面見込みに4個を1単位として藤の花のスタンプ文が押される。外面の高台はほとんど底部との高低差がない。

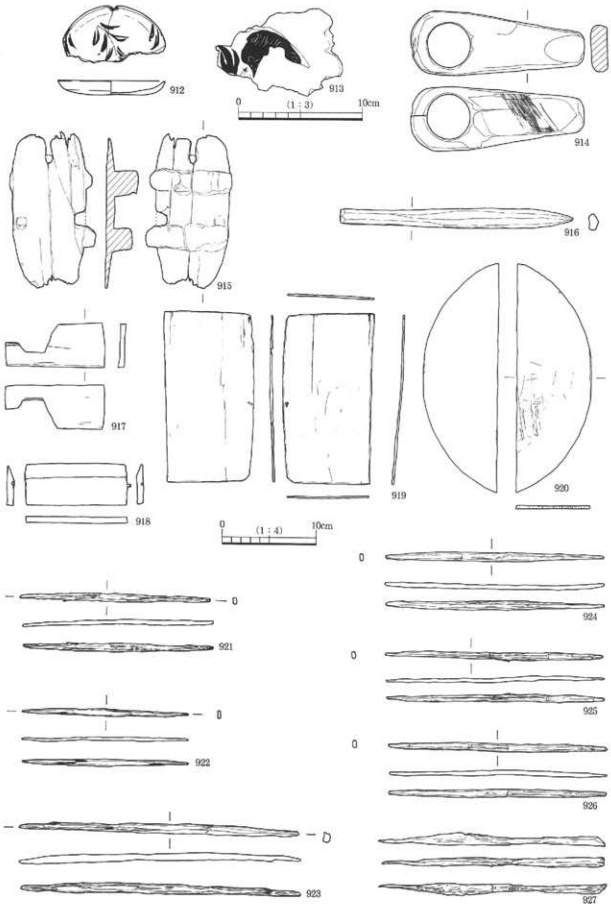
914～923も井戸3820の出土品である。914は長さ18.4㎝、厚さ2.0㎝のきれいに仕上げられた製品であり、中央に直径4.8㎝の穴が開く。片面に斜め方向に幅4㎝ほどの圧痕がみられる。側面、裏面にはみ



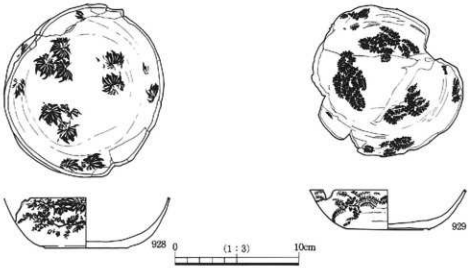
第141図　２Ａ区溝3210・Pit3524木製品



第142図　２Ａ区井戸3645－１・井戸3031木製品



第143図　2 A区井戸3820・井戸3827木製品



第144図　２Ａ区溝3916・井戸3820漆器

られない。幅４㎝の中に１㎜単位に細い筋が観察でき、布もしくは糸をあてた痕跡とも思われる。用途は不明である。

915は下駄で長さ16.0㎝とやや小型である。歯部の破損が著しい。

916は刀状の木製品で１端を鋭く尖らせる。表裏面とも縦方向にきれいに削られる。

917・918はいずれも直径10～15㎝の小型の曲物の側板と共に、底になって出土した。図示したものの他にも数個体あり、底板の替わりをするものであろうか。しかし、円形の側板とはぴったり沿わず、桶状容器として使用していたとは考えられない。917・918とも長さ10～11㎝台で、918は両端中心に木釘が残る。

919は折敷き底板の一部で桜の皮の綴じ紐が残る。920は曲物底板で約1/3残存。一面に刃物痕が残る。

921～923は箸で923のように長さ29.4㎝と箸にしては長すぎるものもあるが、平均20㎝前後の箸が27本出土した。

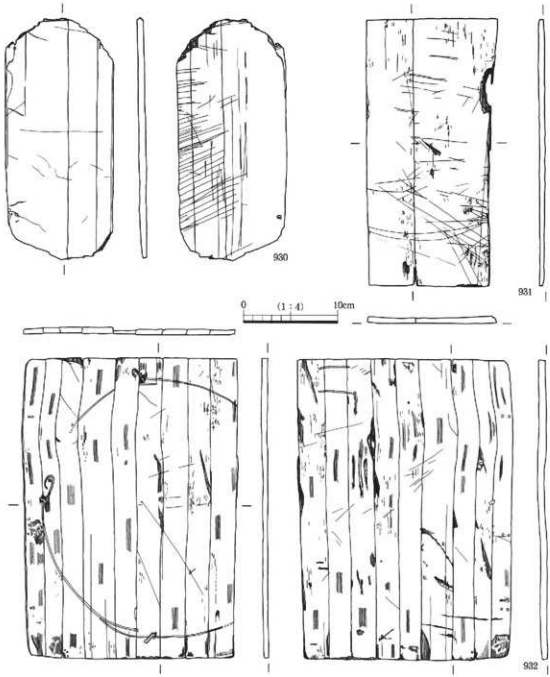
924～927は井戸3827の箸である。長さ23㎝前後、径0.7㎝のものが多く、927は未製品であろう。箸の中には一部火を受けているものもある。

928は第６遺構面溝3916出土の漆器椀で口径13.1㎝、器高4.0㎝、929は井戸3820出土漆器椀で口径12.6㎝、器高3.2㎝と法量も似、ほぼ完形である。黒漆地に赤漆で体部内外面、内面見込みに928は楓状の、929は羊歯状植物スタンプ文が入る。溝3916からは他にも文様は異なるが、同種の漆器椀が出土している。

930・931・933は溝3916出土の曲物底板である。930は円形の、931は方形の底板で片面に刃物痕が残る。

932は長さ31.8㎝の方形の板である。細長く分断しているが一辺の角が隅丸に整えられているので、元来は正方形の一枚板だったと思われる。桜の皮が残った状態で綴じ穴が各辺の中心１箇所ずつに残る。さらに一面には円形の押穴痕がこの綴じ穴を通るように観察できる。このことから、側板が底板の外側をめぐる正方形の容器だったのでなく、３つの綴じ穴を結んだ直径約28㎝の円形の側板がのる容器であったと推定される。草戸千軒町遺跡出土品に類例がある。[3)]

３）３Ａ区の木製品



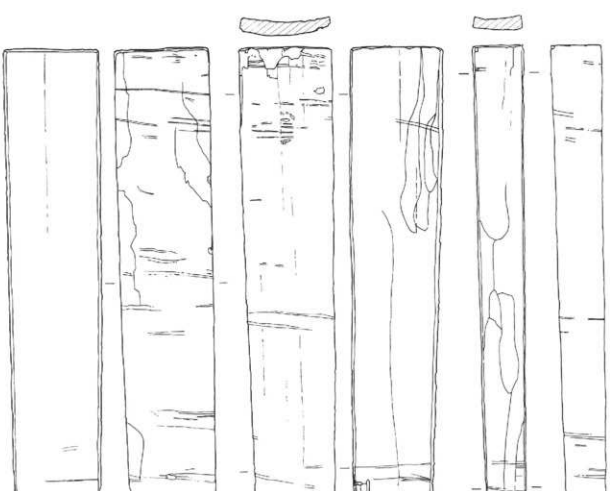
第145図　２Ａ区溝3916木製品

933～935はいずれも井戸58の桶枠板である。井戸58の桶側板は長さ47～49cmのものが19枚並べられ竹の箍で結わえられてあった。幅にはばらつきがあり平均８～９cmであるが、935のように幅5.4cmのものも存在する。表裏、側面とものみ状の工具できれいに加工される。外面には箍の痕跡が残る。

936・938～942は第４遺構面溝203の遺物である。936は折敷底板で角を隈取りしている。片面に刃物痕が残る。

938・940は漆器椀で、938は内外面赤漆で、高台部分のみ黒漆塗りである。高台が高く、器壁も厚くなり、深い椀形をなすなど、比較的新しい漆器椀といえるだろう。

940は口径に比べ器高が浅い。残存状況が悪かったので、実際にはもう少し高くなるかも知れない。体部内外面赤漆塗りで、口縁部内面のみ黒漆で縁取りする。底部は黒漆塗りで、おそらく「大」と思わ



第146図　3 A区井戸58井戸枠桶板

れる字が赤漆で書かれる。938と同時期のものだろう。939は皿で内面赤漆塗り、外面は黒漆塗りで赤漆で笹の葉のような文様が手描きされる。

941・942は用途不明の板状製品である。

937は井戸200の曲物底板である。

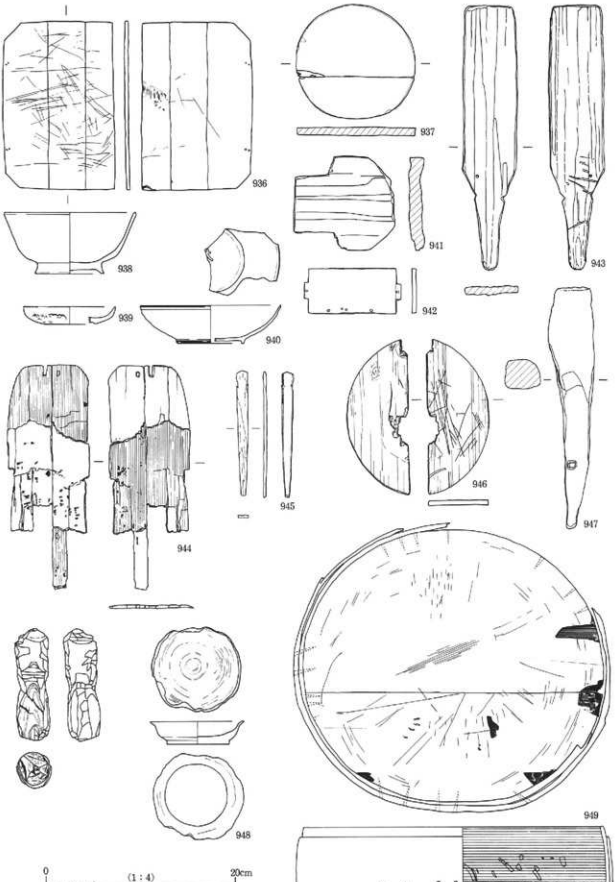
943は溝204より出土した羽子板状木製品である。0.8㎝厚さの均一な長さ20.0㎝の板部から斜めに切られて細い柄部へと続く。板部と柄部の境には左右に切れ込みが入り、また、板部の端1箇所には穿孔をもつ。用途不明である。

944は溝1222出土の草履芯である。長円形をなし、頭部に2個の方形孔をもつ。

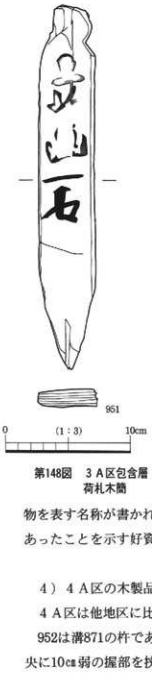
945・946は井戸1226出土品で、945は長さ13.4㎝、幅1.1㎝と小型であるが、頭部をつくり、左右に切れ込みが入る。946は円形の曲物底板で、中心部は焼失している。刃物傷が残る。

947は第5遺構面Pit1232の柱木である。長さ25.5㎝、幅4.7㎝と柱木にしては細いが、先端部分のみが残ったものであろう。下方に1㎝角の方形孔が貫通する。

948は土坑1500出土の漆器皿である。内外面とも黒漆塗り無文でろくろ挽きの痕跡が残る。溝3210出土の漆器皿（893）と似る。



第147図　3Ａ区遺構・包含層木製品



第148図　3A区包含層
荷札木簡

949も土坑1500出土の円形曲物である。底板に側板がついたままの状態で出土するのは珍しい。底板は長径33.4㎝、短径29.9㎝のやや長円形で、側板は土圧や取り上げの際にやや歪みを生じているが、幅7㎝の板を2重に巻いてとじていたようである。底板には18箇所の木釘穴が残る。

また、3A区の第5遺構面では2段組みの曲物井戸、井戸1241・井戸1226を検出した。井戸1241の曲物井戸枠については取り上げ、保存の際にかなり細片化し、図示し得なかった。2段とも直径約42㎝、2重に側板を巻く構造である。

井戸1226の井戸枠曲物は2段とも残存状況が良く、上段の大きい方が径約46㎝、高さ22㎝、下段の小さい方が径37㎝、高さ23㎝である。両方の構造は異なり、側板を2重に巻いたあと、上段の曲物は廻し板を上方にもつのみだが、下段の曲物は上端と下端の2箇所にもつ。側板の綴じ方も異なる。上段の曲物は側板が1列外4段綴じ、廻し板は1列外2段綴じ、下段の曲物は側板が2列前内4段後内2段、廻し板は2列前内2段後外2段綴じである。内面のケビキは側板の上下線に対して縦と斜めの両方、斜格子に入れられている[1]。(図版80～図版82) 井戸1226曲物側板の樹種はヒノキである。

3A区の第7遺構面包含層、水田遺構面からは農具と木簡が出土した。

950は籠編みに使うツチノコ（横槌）である。長さ12㎝、径4㎝の、中心がくびれる鼓形をとる。

951は荷札木簡である。長さ14.5㎝、幅2.1㎝、厚さ0.8㎝の頭部に切れ込みをもつ木簡に「□□□一石」と書かれる。上三字は墨がかすれ判読できないが、品物を表す名称が書かれていたのであろう。940・951とともにこの周辺が生産地であり、物資の集積地であったことを示す好資料である。

4）4A区の木製品

4A区は他地区に比べると木製品の出土量は少ない。溝や河川などの遺構が少なかったためであろう。

952は溝871の杵である。ほぼ完全な状態で、溝にまたがるように、上層で出土した。全長75.4㎝で中央に10㎝弱の握部を挟んで、上方と下方に径約7㎝の叩部がつく竪杵である。一方は先端が丸味を帯び原形をとどめるが、もう一方は磨滅しすり減っている。

953・954・956はすべて溝871の曲物底板である。直径が13㎝弱から28㎝までと様々である。

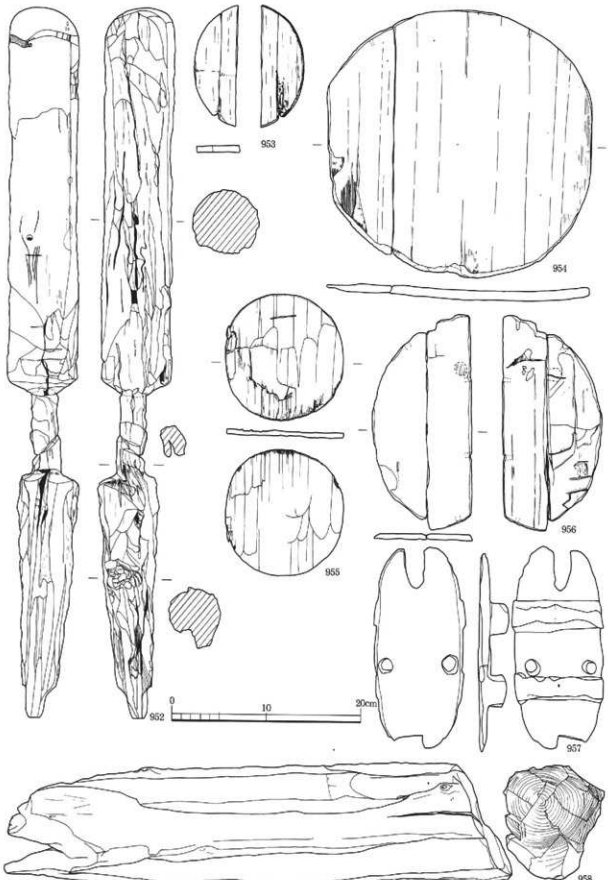
955は第3－b遺構面井戸1184の曲物底板である。径約13㎝でのみの加工痕が明瞭に残る。

957は第6遺構面Pit1794出土の下駄である。長円形の台部に垂直に下がる歯部がつくが、歯部が高さ2㎝と低い。また、表面にかすかに藁状のものが付着する。

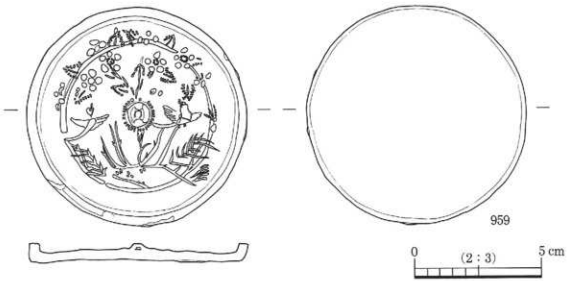
958は第3－b遺構面Pit1052の柱木である。長さ53.4㎝、直径約13㎝の芯材を四角形ないし五角形に面取りして整えている。

註

1）卒塔婆の墨書の読み下しについては一部西本安秀氏の教示を得た。また、下記文献を参考にした。
西本安秀「中世遺跡出土の木製卒塔婆について」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論



第149図　4 A区遺構木製品



第150図　土器溜54山吹双鳥文鏡

叢』　1993

西本安秀「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『網干善教先生古希記念考古学論集』　1998

2）出土時に西本安秀氏に見ていただいた際には「南無多宝如来」との指摘を受けた。

3）『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書II』1994　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

4）『木器集成図録　近畿古代編』　1984　奈良国立文化財研究所　p.48　円形曲物の解説に依った。

（4）金属製品

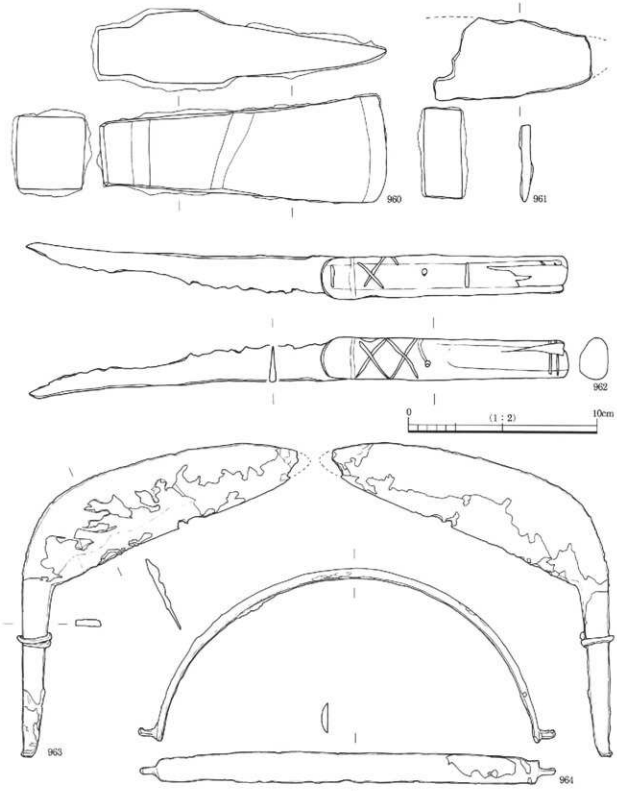
959は1A区第4遺構面より出土した和鏡である。土器溜54は1A区と3A区にまたがって東西約8mの範囲にわたり土器・硯・金属製品などの日常生活用具を検出した土器廃棄域である。この和鏡は土器溜54の土器の密集域よりはややはずれた、南西隅で背面を上にして出土した。箱などは伴わなかったが、わずかな繊維の付着がみられたことから布などに包まれていた可能性がある。土器溜に廃棄されたというよりは、放置されたという検出状況である。

959は直径8.7㎝、厚さ0.4㎝、つまみ部分の径2.1㎝をはかる銅鏡である。背面は外縁より内側0.9㎝幅でたちあがる。つまみを中心にして径11㎝の一条の圏円が描かれ、内区に左右対称に上向きの2羽の鳥が描かれる。上方には五弁の花と葉が、下方には木の枝らしきものが描かれる。

大阪市立博物館前田洋子氏に鑑定いただいた。その結果、花は形から山吹、下の木はその幹とも考えられ、「∴」は州浜を表しているとも思われる。鳥は尾が長いので雀ではなく、名称としては「山吹双鳥鏡」がふさわしいと教示いただいた。型式的には13世紀中頃には存在する鏡であり、土器溜54の土器型式が13世紀後半～14世紀初めに相当すると考えられるので、それよりやや古い形式の鏡であっても、長期間使用または伝来した後、何らかの理由で廃棄されたとしても不思議ではない。文様構成・法量などで似た鏡は存在するが、同笵鏡は今のところ見当たらない[1]。

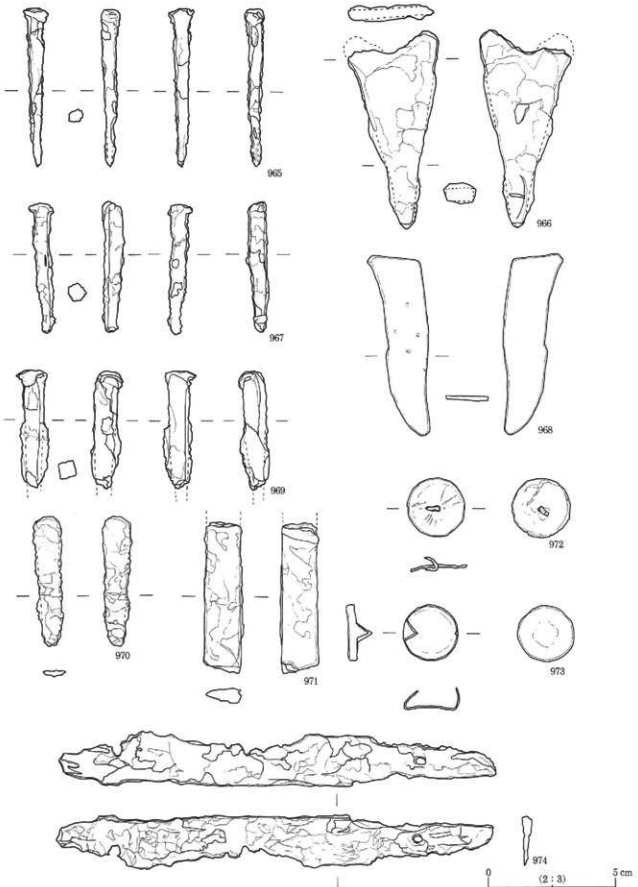
960は2A区第5遺構面溝3197より出土した鉄斧である。表面には錆がかなり付着していたが、赤外線写真でみると柄に装着する部分が空洞であるのがよく分かる。

961は2A区第5遺構面溝3210出土の鎌の刃である。先端と柄部は欠損する。

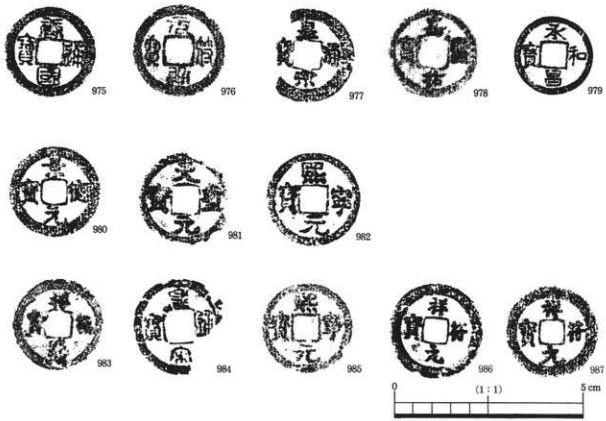


第151図　金属製品（1）

962は１Ａ区第６遺構面落込3015出土の刀子である。全長28.5㎝である。鉄の刃部と木製の柄部が揃った完全な状態で出土した。柄部は抉り込みがあって、細くなった刃の茎部をさし込んでいる。刃の部分はかなりの使用痕跡が認められる。柄は中央に小孔をもち、その穴に紐を通したような擦痕が残る。片面には１個の、その裏面には２個の「×」印が刻まれている。



第152図　金属製品（2）



第153図　銅銭（1）

963は１Ａ区第６遺構面溝3596出土の鉄鎌の刃で、先端部がわずかに欠損するのみのほぼ完全な状態で出土した。また柄に装着する際に使用したと思われる環も柄部についたままの状態で出土した。刃部長14.5㎝、刃部幅4.3㎝、柄部長9.1㎝。

964は２Ａ区第４遺構面土坑2773の鍋の持手である。長さ21.9㎝で断面三日月形に仕上げられ、両端には鍋にかけるための突起が設けられている。

965・967・969・970は各調査区より出土の釘である。いずれも14世紀代の遺物と思われる。

966は２Ａ区溝3178の雁又鏃、968は小刀の刃部であろうか。

971は１Ａ区の火葬墓2145から土師皿と共に出土したので副葬品とも考えられる。刀子等の一部とも思われるが不明である。

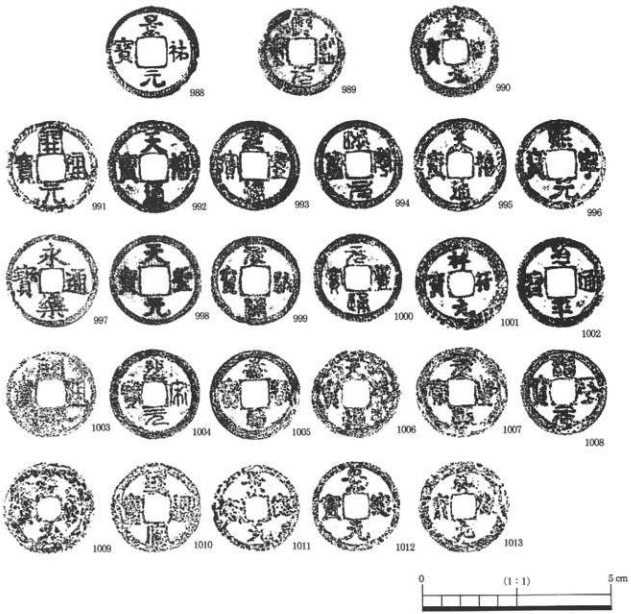
972・973は似た形態をもつが、別の調査区より出土した。972は円板の中心に小孔をもち鉄線を通したもの、973は小円板の縁を立ちあがらせ、２辺に３角形の出っ張りをつけたもので、鈴であろうか。

974は２Ａ区第５遺構面土坑3025出土の刀子の刃部である。現存長17.3㎝、幅2.0㎝で、磨耗著しく、柄に装着するための小孔を１つもつ。

975～987は２Ａ・３Ａ・４Ａ区より出土した銅銭である。このうち、977は３Ａ区第８遺構面ベース層より出土した、皇朝十二銭の一つ、承和昌宝である。以外は唐国通宝や祥符元宝など全て宋銭である。

988～1013は１Ａ区出土の銅銭である。997の永楽通宝、991、1003の開元通宝以外は全て宋銭である。

989は１Ａ区火葬墓2144出土の祥符元宝。991～996は墓2938出土の六文銭である。墓2938は長方形の掘形を残すのみで人骨・棺は出土しなかったが、991～996の６枚の銅銭が重なった状態で出土したため、



第154図　銅銭（２）

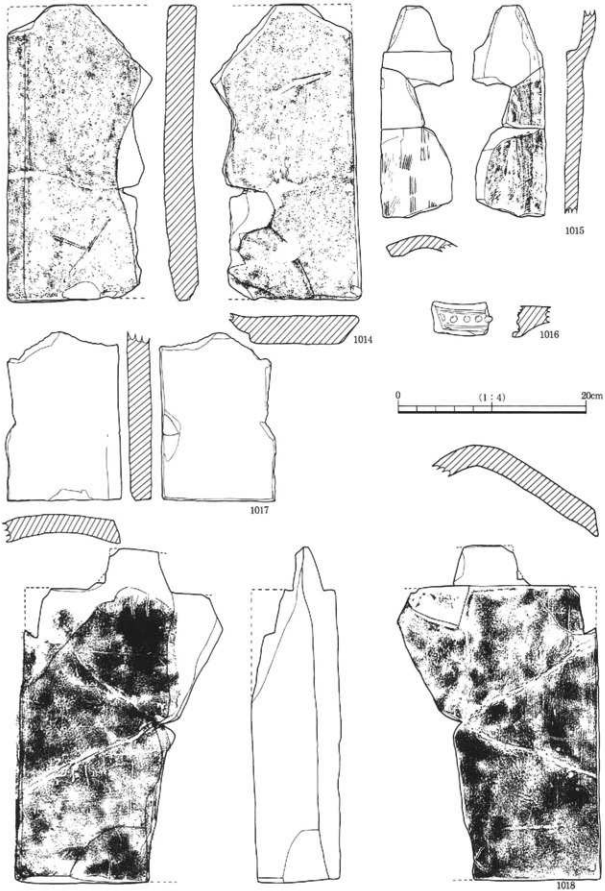
六文銭をもった墓と判定した。開元通宝１枚、天禧通宝２枚、元豊通宝１枚、熙寧元宝２枚である。

997～1002も箱棺墓2644の六文銭である。永楽通宝、天聖元宝、元祐通宝、元豊通宝、祥符元宝、治平通宝各１枚である。

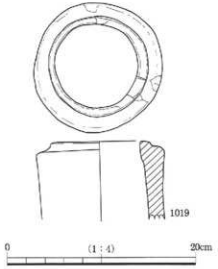
1003～1008は桶棺墓2554出土の六文銭である。漆器椀と共に埋納されていた。開元通宝、聖宋元宝、嘉祐通宝、天禧通宝、元豊通宝、紹聖元宝各１枚である。

1009～1013も桶棺墓2555の埋納銭である。祥符元宝、景徳元宝各２枚、皇宋通宝１枚の計５枚である。

銅銭は全39毎中、宋銭が36枚でそのうち祥符元宝が８枚、熙寧元宝４枚、景徳元宝３枚が多い。これらの銅銭はいずれも流通量の多かったものである。また、火葬墓等の墓から出土した六文銭を大阪府下から出土した中世墓出土銭貨と比較しても[7]、銭貨の種類は似ており、当時普遍的に流通していた銅銭だったのだろう。



第155図　瓦



第156図　１Ａ区出土瓦管

註

1）前田洋子「大阪市立博物館所蔵和鏡について」『大阪市立博物館研究紀要第１冊』　大阪市立博物館
『日本の古鏡ー和装美のプロデューサー』　1985
大阪市立博物館

2）小林義孝・嶋谷和彦「大阪府下の中世墓出土銭貨」『出土銭貨』第２号　1994　出土銭貨研究会
大阪府以外でも中世墓出土銭貨の特集がされている。

（５）瓦

1014は１Ａ区の第３遺構面より出土。一部しか残存しないが、断面の形態より罹振瓦と思われる。玉縁部分が胴部ぎりぎりまで広がらず、断面も鋭く屈曲しないことから市本分類のＣ類かＤ類と思われる。[1)]

1015は３Ａ区第３遺構面井戸200出土の丸瓦である。長さ22.4㎝と小型で、凹面に布目痕をもつ。側面はほぼ平らである。凸面にタタキ痕があり、14～15世紀のものである。

1016は２Ａ区第５遺構面溝3179出土の連珠文軒平瓦である。５つの珠と圏線をもち、全体の３分の１程度の残存と思われる。遺構面の時期（14世紀中頃）に比して古い型式のものである。

1017は３Ａ区の第５遺構面の上面より出土した平瓦である。

1018は１Ａ区の墓域と関連すると考えられる遺構、石列2556で検出した。石列2556は平らな自然石や平瓦が石敷のように敷かれていた遺構で、墓群になんらかの関係があると考える。横方向の断面がくの字状を呈するＢ類の罹振瓦である。長さ35.3㎝、幅21.1㎝。

1019は１Ａ区の第３遺構面より出土した瓦管で、近世以降のものである。

註

1）市本芳三「日置荘遺跡出土瓦の分析」『日置荘遺跡』　1995　大阪府教育委員会・㈶大阪文化財センター
その他瓦の時期などについて市本芳三氏の教示を得た。

第３章　1997年度調査の成果

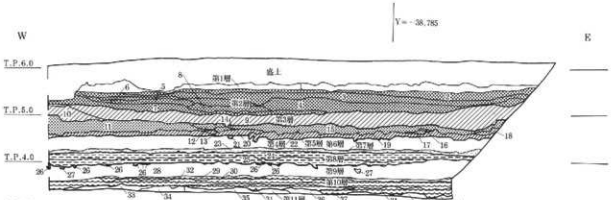
第１節　基本層序

玉櫛遺跡は元茨木川と安威川とに挟まれた沖積地に立地している。さらに元茨木川の右岸よりも標高の低い左岸に立地しているため度重なる洪水の被害を受けている。1997年度の調査区は既往の調査区の中でも最も東に位置しているものである。現在の標高は、T.P.6.1～6.2mでありほぼ平坦であった。１Ｂ区・２Ｂ区とも層位はおおむね対応しているが、部分的に洪水や流路の影響を受けている部分もある。特に第４－２層は、１Ｂ区の南側にのみ分布している層であり、居住するための整地に伴う可能性がある。最も単純な堆積状態であって流水の影響も少ないのは、２Ｂ区北壁であるので、この部分の壁面を基に、この面に見られない第４－２層については、１Ｂ区南壁の土層を用いて概略を述べる。

盛土　木造府営住宅建設時の盛土で、現地表から50cm程である。一部埋設管による攪乱が、第２層まで達している。

第１層　府営住宅建設以前の耕土層である。両トレンチ全域にオリーブ黒色の砂質土が厚さ10cm前後残っている。一部府営住宅建設時の攪乱によってなくなっているところもある。

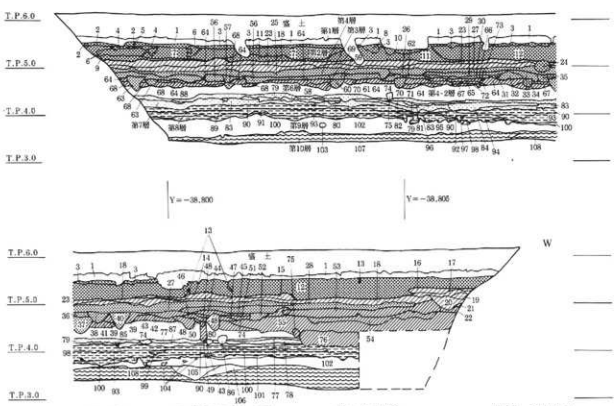
第２層　オリーブ灰色、暗緑灰色の砂質土層で、厚さ40～50cmで両トレンチ全域に認められる。一部攪



1. 5Y　3/1 オリーブ黒色　砂質土
2. 7.5Y 4/2 灰オリーブ色　砂質土
3. 7.5Y 5/2 灰オリーブ色　砂質土
4. 10Y　4/2 オリーブ灰色　砂質土
5. 2.5Y 4/2 暗灰黄色　砂質土
6. 5Y　4/3 暗オリーブ色　砂質土
7. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色　砂質土
8. 5Y　5/2 灰オリーブ色　砂質土
9. 2.5Y 4/2 暗灰黄色　砂質土
10. 2.5Y 5/2 暗灰黄色　砂質土
11. 7.5YR 5/6 明褐色砂
　+7.5Y　5/1 灰色　砂質土
12. 10YR　4/3 にぶい黄褐色　砂質土
13. 10YR　4/6 褐色　砂質土
14. 10YR 5/6 黄褐色　砂質土
15. 7.5YR 4/4 褐色　砂質土
16. 7.5Y　5/2 灰オリーブ色　砂質土
17. 5Y　5/2 灰オリーブ色　砂質土
18. 7.5Y　5/1 灰色　シルト
19. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色　シルト
20. 10Y　6/1 灰色　砂質土
21. 10Y　5/1 灰色　砂混り粘土
22. 7.5GY 4/1 暗緑灰色　粘土
23. 10GY 4/1 暗緑灰色　微砂混り粘土
24. 5GY　4/1 暗オリーブ灰色　シルト
25. 7.5GY 4/1 暗緑灰色　シルト
26. 2.5Y　6/2 灰黄色　砂
27. 2.5Y　5/2 暗灰黄色　砂
28. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色　粘土
29. 10Y　4/1 灰色　粘土
30. 5Y　3/2 オリーブ黒色　微砂混り粘土
31. 10YR　4/1 褐灰色　微砂混り粘土
32. 7.5GY 4/1 暗緑灰色　砂
33. 5Y　5/1 灰色　砂
34. 10Y　4/1 灰色　シルト
35. 10G　5/1 緑灰色　粗砂
36. 5GY　4/1 暗オリーブ灰色　シルト
37. 5Y　3/1 オリーブ黒色　微砂混り粘土

0　(1：80)　4 m

第157図　２Ｂ区北壁断面図



1. 7.5Y 3/2 オリーブ黒色 砂質土
2. 2.5Y 5/3 黄褐色 砂質土
3. 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粘質土
4. 5GY 5/1 オリーブ灰色 砂質土
5. 7.5GY 5/1 緑灰色 粘質土
6. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 中砂～粗砂
7. 5GY 4/1 暗緑灰色 粘質土
8. 5GY 5/1 緑灰色 粘質土
9. 5Y 5/1 灰色 粘質土
10. 7.5GY 5/1 緑灰色 砂質土
11. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 粘質土
12. 7.5GY 4/1 暗緑灰色 砂質土
13. 5GY 3/1 暗緑灰色 粘質土
14. 5Y 6/1 灰色 砂質均粒土
15. 5Y 4/1 灰色 砂質均粒土
16. 5G 5/1 緑灰色 粘土
17. 10Y 5/1 灰色 砂質土
18. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質土
19. 7.5Y 5/1 灰色 粘質～中砂
20. 10Y 6/1 灰色 粘質～粗砂
+10BG 5/1 青灰色 粘土
21. 5GY 5/1 緑灰色 粘土
22. 5GY 4/1 暗緑灰色 粘土
23. 7.5YR 4/3 褐色
+10YR 5/2 灰黄褐色 砂質土
24. 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 粘質土
25. 7.5YR 3/3 暗褐色 砂質土
26. 10YR 5/2 灰黄褐色
+10YR 3/3 暗褐色 砂質土
27. 7.5Y 5/1 灰色 砂質均粒土
28. 7.5Y 5/1 灰色 砂質土
29. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 砂質土
30. 2.5Y 5/4 黄褐色 粗砂
31. 5Y 5/1 灰色 砂質均粒土
32. 10YR 3/4 暗褐色 砂質土
33. 2.5Y 4/3 暗黄褐色 砂質均粒土
34. 10YR 3/4 暗褐色
+10Y 5/1 灰色 砂質均粒土
35. 10YR 4/6 褐色 砂質土
36. 10YR 3/4 暗褐色 砂質粘質均粒土
37. 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 砂質均粒土
38. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質均粒土
39. 5Y 4/2 灰オリーブ色 砂質均粒土
40. 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 砂質均粒土
41. 7.5GY 4/1 暗緑灰色
+7.5YR 4/4 褐色 粘土
42. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質均粒土
43. 7.5Y 6/1 灰色 粗砂
44. 10YR 3/4 暗褐色 粘質土
45. 7.5YR 3/4 暗褐色 砂質均粒土
46. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 砂質土
47. 7.5Y 5/1 灰色 砂質均粒土
48. 7.5Y 4/1 灰色 粘土
49. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 粘土
50. 10Y 6/1 灰色 砂質均粒土
51. 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 粘質土
52. 5Y 4/1 灰色 砂質均粒土
53. 7.5Y 4/1 灰色 砂質均粒土
54. 10Y 4/1 暗オリーブ灰色 粘土
55. 5BG 4/1 暗青灰色 砂質均粒土
56. 5YR 4/4 にぶい赤褐色 砂質土
57. 7.5Y 4/2 灰オリーブ色
+2.5Y 4/3 オリーブ褐色 砂質土
58. 7.5YR 5/6 明褐色
+2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質土
59. 7.5Y 5/1 灰色
+10YR 3/4 にぶい黄褐色 砂質土
60. 7.5Y 6/1 灰色
+5YR 5/6 明赤褐色 砂質土
61. 10YR 5/6 黄褐色
+2.5Y 5/2 暗灰黄色 砂質土
62. 2.5Y 5/1 黄灰色
+10YR 4/4 褐色 砂質土
63. 7.5Y 5/1 灰色
+10YR 4/4 褐色 砂質均粒土
64. 5Y 5/1 灰色 砂
65. 5Y 4/1 灰色 砂質土
66. 7.5Y 4/1 灰色
+10YR 4/4 褐色 砂質土
67. 10GY 5/1 緑灰色 粘土
68. 5GY 5/1 オリーブ灰色 粘土
69. 10Y 4/2 オリーブ灰色
+10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘土
70. 7.5Y 5/1 灰色 砂質土
71. 5GY 5/1 オリーブ灰色
+10YR 4/6 褐色 粘土
72. 7.5GY 5/1 緑灰色 粘質土
73. 7.5Y 5/1 灰色 粘質土
74. 10GY 6/1 緑灰色 粘土
75. 10Y 4/1 灰色
+10YR 6/6 明黄褐色 砂質均粒土
76. 7.5GY 4/1 暗緑灰色 砂礫質均粒土
77. 10GY 5/1 緑灰色 砂
78. 10Y 5/1 灰色 砂
79. 7.5GY 5/1 緑灰色 砂質均粒土
80. 7.5GY 5/1 緑灰色 シルト
81. 5BG 5/1 青灰色 粘土
82. 10Y 5/1 灰色 粗砂
83. 5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト
84. 5Y 6/1 灰色 砂
85. 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 砂質均粒土
86. 5Y 5/1 灰色 砂質均粒土
87. 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 礫砂質均粒土
88. 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 砂質均粒土
89. 7.5GY 5/1 緑灰色 粘土
90. 2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色 礫砂質均粒土
91. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 砂質均粒土
92. 7.5Y 5/1 灰色 礫砂質均粒土
93. 5G 5/1 緑灰色 礫砂
94. 5Y 5/1 灰色 礫砂質均粒土
95. 7.5Y 5/1 灰色 粘土
96. 5Y 5/1 灰色 粘土
97. 10Y 5/1 灰色 砂質均粒土
98. 7.5Y 5/1 灰色 シルト
99. 10Y 6/1 灰色 粗砂
100. 5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂
101. 7.5Y 4/1 灰色 粘土
102. 5Y 3/2 オリーブ黒色 粘土
103. 2.5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂
104. 10Y 5/1 灰色 粗砂
105. 10YR 4/1 褐灰色 砂質均粒土
106. 2.5Y 4/1 黄灰色 砂質均粒土
107. 5Y 5/1 灰色 砂質均粒土
108. 5GY 5/1 オリーブ灰色 礫砂～粗砂

0 (1:80) 4m

第158図　１Ｂ区南壁断面図

拌された中砂～粗砂を含む。染付小杯、四葉形石硯などが出土している。近世の堆積層と思われる。攪乱の一部には、この層まで及んでいるものもある。

第３層　第１遺構面のベースとなる層である。第３層、第４層が1995年度調査のⅠ層に対応する。暗灰黄色、灰色の砂質土層で、厚さ15㎝である。和泉型Ⅱ型式の瓦器椀や、長さ約15㎝の鉄製小刀などが出土している。

第４層　第２遺構面のベースとなる層である。黄褐色、褐色、灰色、暗オリーブ褐色の砂質土層で、厚さ15～20㎝である。三枚重ねの土師皿、白磁碗、土師質甕、平瓦など豊富な遺物が出土している。

第４－２層　第５層とともに第３遺構面のベースとなる層で、１Ｂ区の南部にのみ堆積する。灰色砂質土、灰色砂混り粘土で、厚さ20㎝である。土師皿などが出土している。

第５層　第３遺構面のベースとなる層で、１Ｂ区の中央部、北部にかけてと、２Ｂ区に堆積する。オリーブ灰色シルト層・粘土層で、厚さ10㎝である。第４－２層と第５層が1995年度調査のⅡ層に対応すると思われる。２Ｂ区で瓦器椀が出土している。

第６層　第４遺構面のベースとなる層である。緑灰色、暗緑灰色の粘土層で、厚さ36㎝である。東播系須恵器鉢底部、山茶碗底部などが出土している。1995年度調査のⅢ層である。

第７層　平安時代の水田を埋めた洪水による砂礫層である。ラミナがみられるが、部分的に攪拌され乱れる。緑灰色、灰色の砂礫層でシルト状の部分から粗砂、礫までを含む。厚さ5～20㎝である。瓦器椀、白磁皿などが出土している。1995年度調査のⅤ層である。

第８層　第５遺構面のベースとなる層で攪拌された耕土層である。暗オリーブ灰色、暗緑灰色のシルト層、暗オリーブ灰色、オリーブ灰色の砂混り粘土層で、厚さ24㎝である。２Ｂ区で曲物の底板、柄状木製品などが出土している。

第９層　第６遺構面のベースとなる層であり水田の耕土層である。オリーブ黒色粘土層で、有機物を多く含む。厚さ30㎝である。1995年度調査のⅦ層である。２Ｂ区で、用途不明木製品が出土している。古墳時代から奈良時代の層と思われる。

第10層　第７遺構面のベースとなる層である。洪水と流路の影響を受けていると思われる灰色砂混り粘土層で、厚さ26㎝である。

第11層　第８遺構面のベースとなる層である。洪水堆積層と思われる緑灰色粗砂から暗オリーブ灰色シルトが堆積する。

第２節　遺構

（１）第１遺構面

第３層上面で検出した遺構面であり、１Ｂ区では溝と直径10～20㎝の多数のピットを、２Ｂ区では井戸と調査区隅で溝の一部を検出した。両トレンチともT.P.5.0m付近で検出している。遺構面の年代は、遺物が細片ばかりであるため明確ではないが、14世紀以降であると思われる。

溝６

１Ｂ区中央で検出した東西方向の溝である。検出面からの深さは約16㎝、最大幅は、約10mであるが断面観察によると２層上面から切り込んでいる遺構である。埋土は黄灰色砂質土、褐色粗砂であり、検出したのは一番底の部分である。流路であったと思われる。

ピット群

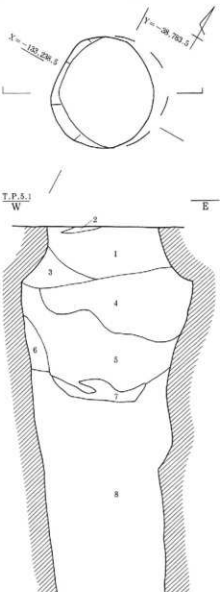
１Ｂ区中央で検出した溝６の両側で検出した数十個のピットである。直径10㎝前後の小規模なものが多く杭の跡であると思われる。ピットの分布状況は、調査区南側では散らばって存在している。一方調査区北側では、かたまって存在しているところもあり、南側よりも数が少なくまばらな感じを受ける。その配置には、規則性は見いだせない。また遺物が出土したものも幾つかあるが細片ばかりであり、時期は明確にはできない。

井戸１

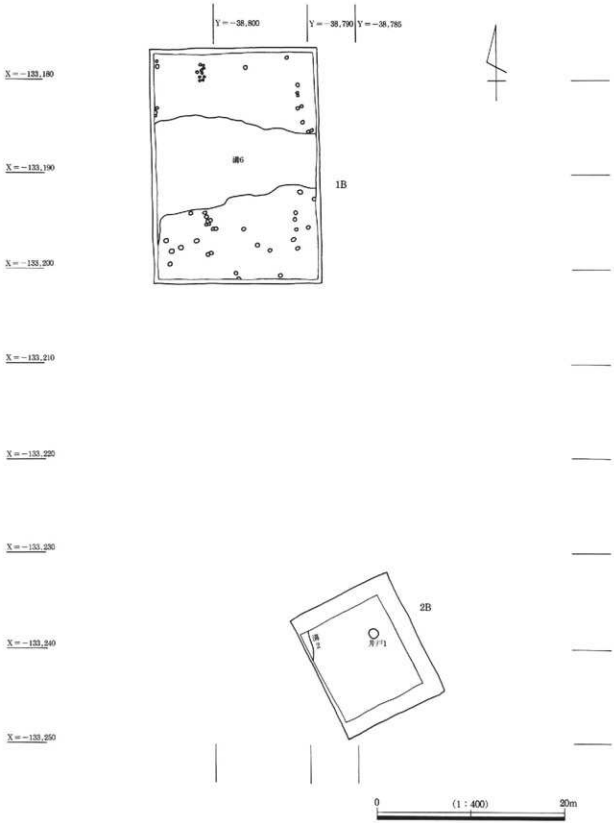
２Ｂ区の北寄りで検出した。検出面での直径は80㎝、底までの深さは3.1mをはかる。検出面の下方で壁面がえぐれている。その影響で一部掘方の直径が広がっている部分もある。井戸枠の痕跡は全く見られず素掘の井戸であった可能性もある。埋土は上層より黄褐色微砂～中砂、にぶい黄色砂質土、暗オリーブ灰色微砂、暗緑灰色粘土・灰色シルト・暗オリーブ灰色シルトのブロック層の順で、最下層は人為的に埋められたとも考えられるが、上層は洪水によって一気に埋まったような様相を示している。遺物は皆無であったので時期は不明である。

溝２

２Ｂ区の西側コーナー部分で検出された溝である。調査区の端であり、幅68㎝、深さ13㎝を検出したのみである。出土遺物は皆

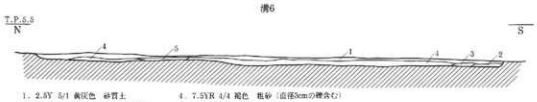


第159図　２Ｂ区第１遺構面井戸１平面・断面図



第160図　１Ｂ・２Ｂ区第１遺構面平面図

無であった。埋土はオリーブ褐色微砂～中砂であり、流路であったと思われる。第２遺構面でほぼ同じ位置に溝28が検出されており、２Ｂ区の西端はある程度固定された流路の通っていた位置であったと考えられる。



第161図　１Ｂ区第１遺構面溝６断面図

（２）第２遺構面

第４層上面で検出した遺構面であり、１Ｂ区・２Ｂ区ともに溝と土坑を検出した。１Ｂ区の中央部では、西から東に向かって洪水によると思われる黄灰色砂が広がっており、その上に３本の溝がほぼ同じ方向に伸びている。両トレンチともT.P.4.9m付近で検出している。土坑108の遺物は13世紀後半のものであるが一方で溝52の遺物は11世紀後半～12世紀初めのものであり時期差がみられるが遺構面としては、13世紀後半のものであると思われる。

１Ｂ区

溝52

調査区南東部で検出した南北方向の溝である。長さ２ｍ、幅17㎝、深さ６㎝である。検出分の中程で土師皿と瓦器椀片が出土した。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。出土遺物からは、11世紀後半～12世紀初めにかけての遺構であると思われる。

溝58

調査区南東部で検出された東西方向の溝である。長さ4.6m、幅26㎝、深さ７㎝で、埋土は灰色砂質土である。

溝74

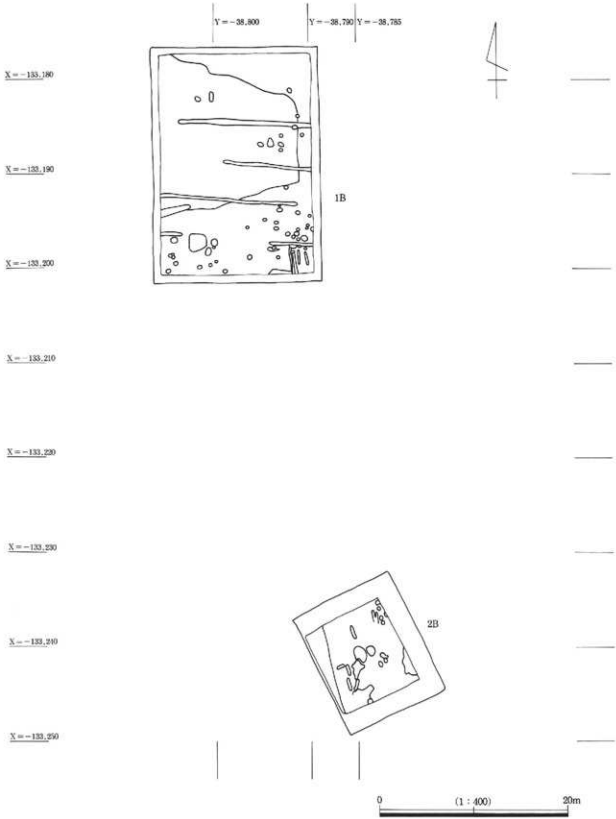
調査区中央部で検出した東西方向の溝３本の内で一番南側のものである。長さ14.5m、幅21㎝、深さ７㎝である。埋土は黄褐色砂質土である。

溝104

調査区中央部で検出した東西方向の溝３本の内で中央のものである。長さ9.5m、幅30㎝、深さ８㎝である。埋土は褐色砂質土である。

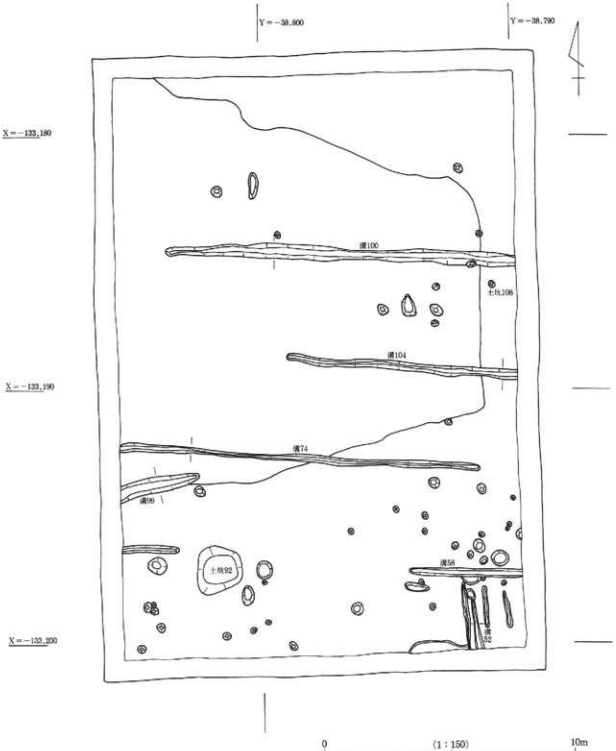
溝100

調査区中央部で検出した東西方向の溝３本の内で一番北側のものである。長さ14m、幅55㎝、深さ８㎝である。埋土は褐色砂質土である。第３遺構面でほぼ同じ位置に溝195が検出されており、さらに深い溝であった可能性もある。



第162図　１Ｂ・２Ｂ区第２遺構面平面図

溝74・溝104・溝100の３本の溝は、ほぼ等間隔で同方向に伸びており、埋土もよく似ていることから何らかの相関関係があったと思われる。溝58も溝74からの間隔が溝74・溝104・溝100の３本それぞれの間隔と近いので同様に関連する遺構であった可能性もある。



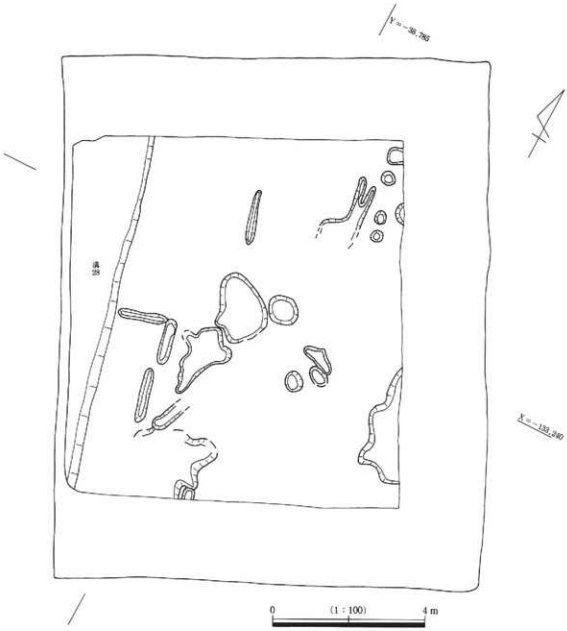
第163図　１Ｂ区第２遺構面平面図

溝99

溝74の南側で検出されたやや北に振った東西方向の溝である。長さ3.5m、幅53cm、深さ７cmである。埋土は灰オリーブ色砂質土、褐色砂質土である。

土坑92

調査区南西部で検出した直径1.5m、深さ17cmの円形の土坑である。埋土は暗オリーブ灰色粘質土、



第164図　２Ｂ区第２遺構面平面図

灰色粘質土である。

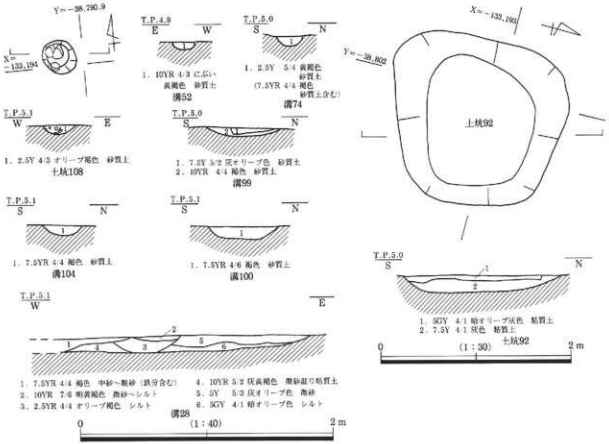
土坑108

溝100の南側で検出された土坑である。長径30㎝、短径22㎝、深さ７㎝の円形の土坑である。和泉型Ⅳ型式の瓦器椀や土師皿などが上向きの状態で出土した。埋土はオリーブ褐色砂質土である。13世紀後半の遺構であると思われる。

２Ｂ区

溝28

第１遺構面で検出した溝２の下にあたる調査区西端で検出した溝である。南北方向に伸びており、検出分の幅は２ｍ、深さは14㎝である。埋土は灰オリーブ微砂、暗オリーブ灰色シルト、褐色中砂～粗砂



第165図　１Ｂ区・２Ｂ区第２遺構面遺構平面・断面図

であり、流路であったと思われる。

（３）第３遺構面

１Ｂ区においてのみ第４－２層および第５層上面で検出した遺構面である。溝、土坑を主に調査区南部で検出した。調査区の中央から北にかけては、柔らかい粘土が広がっている。１Ｂ区南側が居住域であり、１Ｂ区と２Ｂ区との間に建物などの生活空間が広がっていたものと思われる。11世紀後半～12世紀初めにかけての遺構面である。T.P.4.8m付近で検出された。

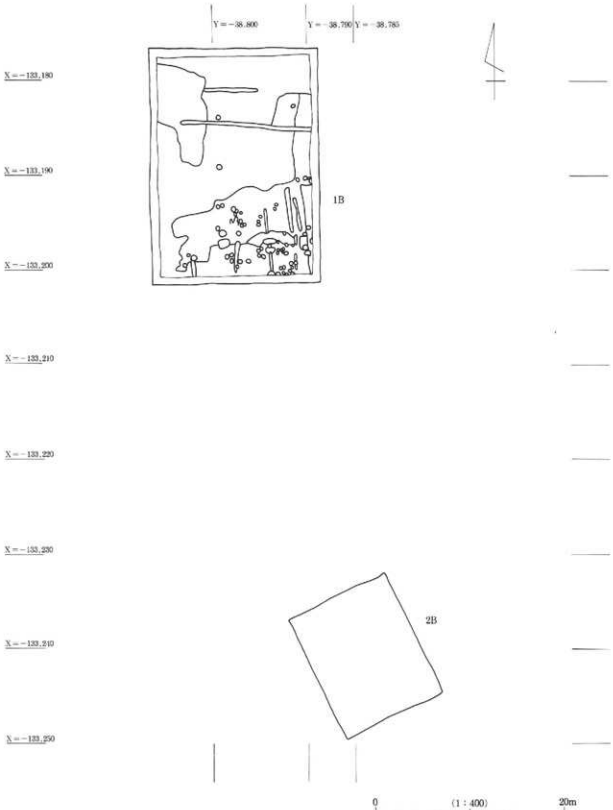
１Ｂ区

土坑113

調査区南西部で検出した土坑である。南北1.6m、東西１m、深さ12㎝の長方形土坑で、Ⅱ型式の瓦器椀や土師皿などの土器が多数出土した。埋土は暗緑灰色粘質土である。11世紀後半～12世紀初めにかけての遺構であると思われる。

土坑198

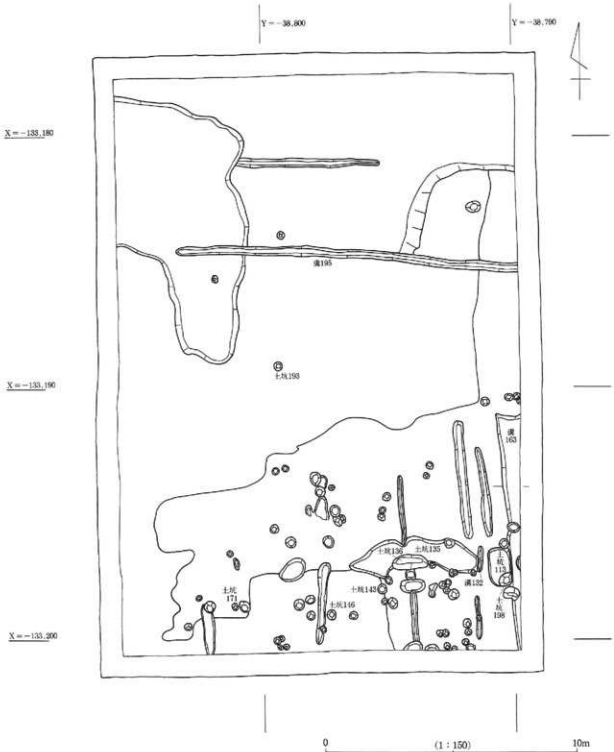
土坑113内から検出された土坑である。長径70㎝、短径50㎝の円形の土坑で、深さは土坑113の底より14㎝である。Ⅰ－３型式の瓦器椀や土師皿が出土している。埋土はオリーブ黒色砂質土である。11世紀後半～12世紀初めにかけての遺構であると思われる。



第166図　１Ｂ・２Ｂ区第３遺構面平面図

土坑135

東西５ｍ、南北1.2～1.5ｍ、深さ10㎝の不定形の土坑である。土坑113と並んで多数の土器が出土している土坑である。埋土は暗オリーブ灰色微砂混り粘土である。11世紀後半～12世紀初めにかけての遺



第167図　ⅠB区第３遺構面平面図

構であると思われる。

土坑136

土坑135の南側に切りあって検出された東西1.4m、南北60cm、深さ10cmの楕円形の土坑である。瓦器椀が底を上にした状態で出土している。埋土は灰オリーブ色砂混り粘土、暗オリーブ灰色微砂混り粘土である。11世紀後半～12世紀初めにかけての遺構であると思われる。

土坑136は埋土が2層になっているが、下層の土は、土坑135のものとよく似ているので本来の土坑136は、上層部分だけで、下層は土坑135であった可能性もある。そうなると土坑136出土の瓦器椀も土坑135のものになる可能性もあるが、調査時の出土遺構のままで掲載している。

土坑193

調査区中央部の粘土層上面で他の遺構からは離れた位置で検出された土坑である。直径30㎝、深さ12㎝の円形の土坑である。土坑内には2枚の板が重なった状態で出土している。下の板が長さ18㎝、幅8㎝、厚さ4㎝であり、上の板が長さ12㎝、幅8㎝、厚さ3㎝であった。埋土は灰色砂である。

土坑171

調査区南西部で検出された直径25㎝、深さ10㎝の円形の土坑である。瓦器椀、土師皿が出土している。埋土は黄灰色砂質土である。11世紀後半～12世紀初めにかけての遺構であると思われる。

土坑143

土坑135の南側で検出された直径36㎝、深さ25㎝の円形の土坑である。土坑内からは多角形に面取りされた柱が出土している。埋土は灰色微砂混り砂質土である。

土坑146

土坑143の南西で検出した直径32㎝、深さ42㎝の円形の土坑である。土坑内からは、四角形に面取りされた柱が出土している。埋土は暗オリーブ灰色砂質土である。

溝132

土坑135の東側で切りあって検出された溝である。長さ1.4m、幅16㎝、深さ7㎝である。この溝で出土した瓦器皿は、土坑113から出土したものと接合したため、2つの遺構は同時期の遺構であると思われる。埋土は灰オリーブ色砂礫混り粘土である。

溝163

調査区の東端で検出された南北方向の溝である。検出できた部分での幅は64㎝、深さは12㎝である。埋土は灰色微砂混り粘土、暗緑灰色粘土である。

溝195

調査区の北側で検出された東西方向の溝である。長さ13.6m、幅42㎝、深さ8㎝である。第3遺構面においてもほぼ同じ位置で溝100が検出されており、1つの遺構であった可能性もある。埋土は灰色粘質土である。

（4）第4遺構面

第6層上面で検出した遺構面である。1B区では、遺構は調査区南部に集中しており、南西部の落込や、溝、土坑などが検出されている。溝256よりも北側は、遺構面のベースとなる粘土層は南側よりも